

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第8集

# 茶木畠遺跡

田方学区新設高校敷地内埋蔵文化財発掘調査報告書

1985

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第8集

# 茶木畠遺跡

田方学区新設高校敷地内埋蔵文化財発掘調査報告書

1985

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

## 序

茶木畠遺跡は静岡県による田方学園新設高校の建設に伴なって昭和58年度に発掘調査を実施し、本年度に入り整理・報告したものである。

遺跡の所存する愛鷹南東麓は、古くから、先土器・縄文時代遺跡の集中する地域として広く知られてきたが、近年とくに、愛鷹ロームを構成する上部ローム層中より、先土器時代石器が発見され多くの新知見を得ている地域である。今回の調査においては、木葉形尖頭器、有舌尖頭器など先上器時代の石器群をはじめとして、縄文時代中期前葉を中心とする多くの遺構・遺物が発見された。そのうち、先上器時代終末と考えられる尖頭器、有舌尖頭器の出土は、静岡県においては、調査例の少いものであって、とくにその出土の層位状況が確認できたことは、きわめて意義深いものといえるのであった。あわせて、縄文時代遺構のうち、とくに埋甕は縄文時代中期前葉とみられるものでこの地域においては最古といえるグループに属する例として特筆すべきものである。

調査は、財団法人駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所の時期に現地調査を実施したのであり、静岡県埋蔵文化財調査研究所の設立に伴って、それを継承したものであるが、こうした経緯をふりかえるとき、多くの人々の援助と協力があったことを忘れる事はできない。なによりも深い理解をもって事業にあたられた、静岡県教育委員会、静岡県上地開発公社、および現地造成を担当された方々に敬意を表するものであり、あわせて、献身的な努力をおしまれなかつた長泉町教育委員会および指導助言にあたられた静岡県教育委員会文化課に深い謝意を呈するものである。

私は、本報告書が、このような多くの機関や関係の方々の協力にもとづき、さらに執筆に当った所員の並々ならぬ苦心と努力とによって刊行され、埋蔵文化財の活用の上に、かつまた研究の貴重な資料として大きい役割を果たすことを喜びとするものである。

昭和60年

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
所長 斎藤 忠

## 例　　言

1. 本書は、静岡県駿東郡長泉町下長窪に所在する茶木畠遺跡の調査報告書である。
2. 昭和58年度調査は、田方学区新設高校敷地内埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県の委託を受けて静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、調査調整機関長泉町教育委員会・調査実施機関財団法人駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所で実施した。昭和59年度調査については、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（昭和59年5月1日設立）が継承してあたった。
4. 昭和58年度調査は、昭和58年7月20日から昭和59年3月31日まで現地調査および一部整理作業を行い、昭和59年度調査は、昭和59年5月1日から昭和60年3月31日まで整理・報告作業を実施した。
5. 発掘調査は、長泉町教育委員会杉沢正敏指導主事・静岡埋蔵文化財調査研究所佐藤達雄（主任調査研究員）・佐野五十三（主任調査研究員）・足立順司（調査研究員）を調査員として実施した。
6. 本書の執筆は足立順司があたり、編集・刊行については静岡県埋蔵文化財調査研究所が行なった。
7. 遺跡の地質調査は、静岡県立教育研修所高橋豊氏に依頼して実施したが、その調査結果については第Ⅲ章第1節に火山灰の層序を、特論に本遺跡各土層の鉱物組成を掲載した。
8. 土坑の覆土は、それぞれつぎの網目で表わした。



# 目 次

第Ⅰ章 調査の経過 .....	1
第1節 調査に至る経過 .....	1
第2節 調査の方法 .....	3
第3節 調査の経過 .....	3
第Ⅱ章 位置と環境 .....	5
第1節 地理的環境 .....	5
第2節 歴史的環境 .....	5
(1) 長泉町の先土器時代 .....	5
(2) 長泉町の縄文時代 .....	7
第Ⅲ章 遺 構 .....	10
第1節 土 壤 .....	10
(1) 愛鷹南東麓にみられる火山灰の層序 .....	10
(2) 遺跡の基本土層 .....	12
第2節 先土器時代 .....	13
第3節 縄文時代 .....	13
(1) 調査区の概観 .....	13
(2) 遺物の出土状態と遺構 .....	13
(3) 上 坑 .....	15
(4) 埋 載 .....	15
第Ⅳ章 遺 物 .....	22
第1節 先土器時代 .....	22
(1) 尖頭器 .....	22
(2) 有舌尖頭器 .....	22
(3) ナイフ形石器 .....	22
(4) 削器 .....	22
(5) 石核 .....	22
第2節 縄文時代 .....	25
(1) 土器 I .....	25
(2) 石器 .....	42
第Ⅴ章 ま と め .....	53
第1節 先土器時代について .....	53
第2節 縄文時代について .....	54
特 論 .....	56

## 挿 図 目 次

第 1 図 位 置 図 .....	1
第 2 図 発掘場配置図 .....	2
第 3 図 調査状況図 .....	4
第 4 図 遺跡地形図 .....	6
第 5 図 周辺遺跡分布図 .....	8
第 6 図 愛鷹南東麓の表層地質断面図 .....	11
第 7 図 土層模式図 .....	12
第 8 図 B地区全体図 .....	14
第 9 図 B地区山上石器分布図 .....	17
第 10 図 上坑実測図 (1) .....	18
第 11 図 " (2) .....	19
第 12 図 " (3) .....	20
第 13 図 " (4) .....	21
第 14 図 埋甕実測図 .....	21
第 15 図 石器実測図 (1) .....	23
第 16 図 " (2) .....	24
第 17 図 上器拓影図 (1) .....	28
第 18 図 " (2) .....	29
第 19 図 土器実測図 (埋甕 1、2) .....	30
第 20 図 土器拓影図 (3) .....	31
第 21 図 " (4) .....	32
第 22 図 " (5) .....	33
第 23 図 " (6) .....	34
第 24 図 " (7) .....	35
第 25 図 " (8) .....	36
第 26 図 " (9) .....	37
第 27 図 土器実測図 (埋甕 3) .....	37
第 28 図 石器実測図 (3) .....	43
第 29 図 " (4) .....	44
第 30 図 " (5) .....	45
第 31 図 " (6) .....	46
第 32 図 " (7) .....	47
第 33 図 " (8) .....	48
第 34 図 石器実測図 (9) .....	49
第 35 図 愛鷹南東麓茶木畠遺跡断面に見られる表層地質断面図 .....	57

## 挿表目次

第 1 表 石器計測値一覧 (1) .....	24
第 2 表 山上土器一覧 (1) .....	38
第 3 表 " (2) .....	39
第 4 表 " (3) .....	40
第 5 表 " (4) .....	41
第 6 表 石器計測値一覧 (2) .....	51
第 7 表 " (3) .....	52

## 図版目次

図版 第 1	1. 茶木畠遺跡遠景（航空写真）
図版 第 2	1. 遺跡遠景（南より） 2. A 地区近景（東より） 3. B 地区遠景（北より）
図版 第 3	1. A C 地区完掘状態（南より） 2. F 4 区十層堆積状態
図版 第 4	1. C 地区完掘状態（西より） 2. 尖頭器出土状態 3. 尖頭器山上状態 4. 有舌尖頭出土状態
図版 第 5	1. 埋甕 1 2. 埋甕 2 3. 埋甕 3
図版 第 6	1. A 地区完掘状態（東より） 2. ピット - 12、13 3. ピット - 52 4. ピット - 54 5. ピット - 61 6. ピット - 66 7. ピット - 76
図版 第 7	1. B 地区完掘状態（北より） 2. ピット - 89 3. ピット - 93 4. ピット - 108 5. ピット - 133 6. ピット - 139

- 図版 第8 1. B地区遺物出土状態  
2. 大珠出土状態  
3. 石斧出土状態
- 図版 第9 1. 石器(尖頭器1)  
2. 石器(尖頭器2)
- 図版 第10 1. 石器(尖頭器3)  
2. 石器(有舌尖頭器)  
3. 石器(ナイフ形石器・削器)  
4. 石器(削器・石核)
- 図版 第11 1. 土器1(埋甕)1  
2. 土器1(細部)  
3. 上器1(細部)
- 図版 第12 1. 土器2(埋甕2)  
2. 土器3(埋甕3)
- 図版 第13 1. 土器(第I群)  
2. 上器(第I群)
- 図版 第14 1. 土器(第I群)  
2. 土器(第II群)
- 図版 第15 1. 上器(第II群)  
2. 上器(第III群)
- 図版 第16 1. 上器(第III群)  
2. 土器(第III群)
- 図版 第17 1. 上器(第III群)  
2. 上器(第IV群)
- 図版 第18 1. 土器(第IV群)  
2. 土器(第IV群)
- 図版 第19 1. 土器(第IV群)  
2. 土器(第IV群)
- 図版 第20 1. 土器(第IV群)  
2. 上器(第IV群)
- 図版 第21 1. 土器(第IV群)  
2. 土器(第V群)
- 図版 第22 1. 石器(石斧1)  
2. 石器(石斧2)  
3. 石器(石斧3)
- 図版 第23 1. 石器(石斧4)  
2. 石器(石斧5)  
3. 石器(石斧6)
- 図版 第24 1. 石器(磨石2)  
2. 石器(磨石1)  
3. 石器(磨石3)

- 図版 第25 1. 石 器(石 挑)  
2. 石 器(石 鐘)  
3. 石 器(大 珠)表  
4. 石 器(大 珠)裏

図版 第26 愛媛ローム層の現生腐植質火山灰及び上部ローム層上位の鍵層に見られる鉱物

# 第Ⅰ章 調査の経過

## 第1節 調査に至る経過

昭和53年7月、静岡県教育委員会は、今後の高等学校整備に関し、静岡県高等学校整備改善委員会に対して基本的考え方について意見を求めた。これを受け、今後、本格化する第2次高等学校生徒急増期の後半期間に対する対策を中心的議題とし、協議・検討をすすめた。その結果、昭和60年代初頭までの本県高等学校教育の拡充整備の在り方について意見をとりまとめ、昭和54年12月には、「高等学校の整備改善について」として報告した。その中で、今後、高等学校新設を要する地域として、田方、沼駿、富士宮、清瀬、志摩、西遠の学区があげられている。

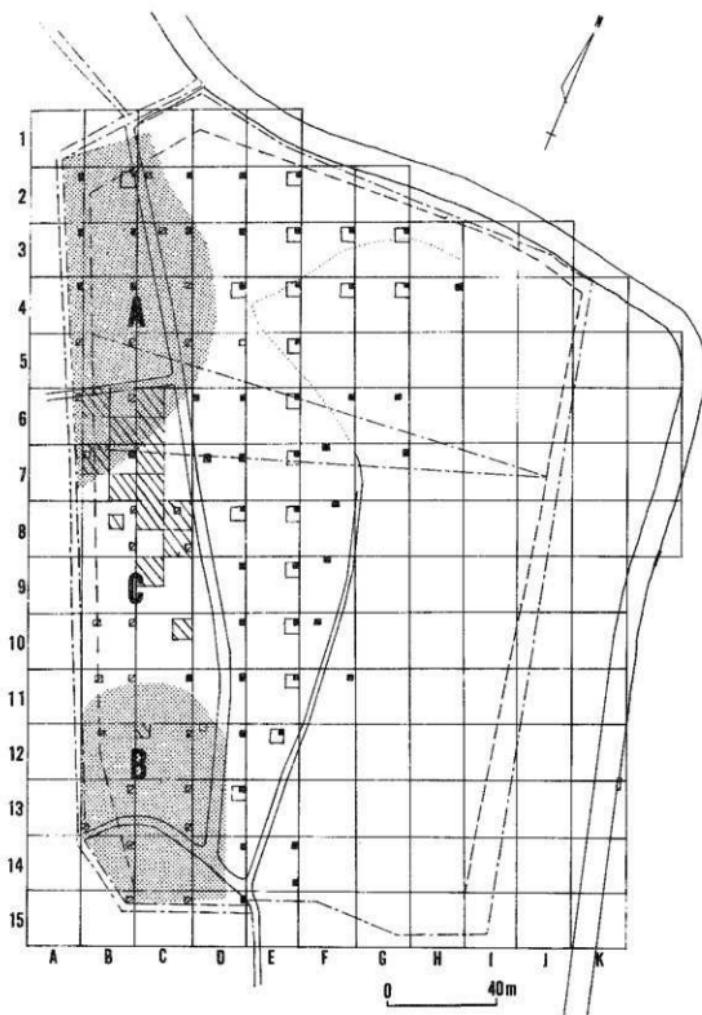
田方学区については、昭和57年度中に地域の決定がなされ、昭和58年7月に入って、正式の場所が選定された。その位置は、駿東郡長泉町上長瀬地内にあって、国鉄御殿場線下上狩駅より北へ3kmに位置する。選定された造成予定地は、「静岡県遺跡地名表」に登録されている茶木畠遺跡が存在し、前掲書によれば、縄文時代前期・中期および弥生後期のもので、縄文土器・石器・弥生土器・土師器が採集されている。このほか、本遺跡周辺の遺跡の状況から先土器時代遺跡の存在も指摘されていたこともあって、その取扱いについて、静岡県教育委員会、長泉町、静岡県開発公社等関係機関で協議が重ねられた。

その結果、田方学区新設高等学校用地内に所在する茶木畠遺跡は工事に先立って事前に発掘調査をおこない、記録保存をはかることに決定した。発掘調査は、長泉町教育委員会の協力を得て、財団法人駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所があたることとし、58年7月20日、静岡県・長泉町・調査研究所との間に埋蔵文化財発掘調査委託契約が締結された。

58年度は、新設高校用地内10,000m<sup>2</sup>を発掘調査し、昭和59年3月31日に業務を完了した。昭和59年度は、本事業を59年5月1日に発足した財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が継承して静岡県より委託を受け、5月1日付をもって委託契約が締結された。その業務内容は出土遺物の整理と報告書作成であった。



第1図 位置図



第2図 発掘区配置図

## 第2節 調査の方法

調査にあたっては、新設高校の工事用基準杭NO00からNO13を主軸とし、 $20m \times 20m$ の方眼をかけた。各グリットの呼称は北より1、2、3……の数字で、西よりA、B、C……とアルファベットをとり、各区の名称は座標方式で、例えば、A 2区、A 3区等と標示することとした。

また、各グリットの北東隅に $2m \times 2m$ の試掘ピットを設定し、まず第1段階調査として縄文時代の遺跡の範囲と性格の把握につとめた。第2段階調査としては、縄文時代の確認調査終了後、グリットを $5m \times 5m$ に拡げ、そのうち $2m \times 2m$ の範囲を第1スコリア層～第3スコリア層まで掘り下げ先土器時代の確認を実施した。

これらの確認調査によって、縄文時代、先土器時代の文化層の発見された区域について、北よりA地区（縄文時代）、C地区（先土器時代）、B地区（縄文時代）と呼称し、平面調査範囲を確定した。

なお、記録として、「調査日誌」「調査日報」を作成するとともに、遺構として認められたものは「遺構カード」にその所見を記入した。実測図は20分の1をスケールの原則として、詳細図の必要なものについては10分の1で簡化した。この作図にはB3版方眼紙を使用することとし、 $20m \times 20m$ の1グリットは北東をI、北西をII、南東をIII、南西をIVとして4分し、それぞれ、北半分、南半分にわけ計8枚で構成される。例えば、A 2-I-N、A 2-II-Sである。

写真撮影については、中型カメラ、小型カメラを併用した。遺構、遺物の状態を主として中型カメラを使用し、モノクロのメモ用、カラースライド撮影に小型カメラを使用した。

## 第3節 調査の経過

昭和58年8月18日～8月26日

現地調査開始。境界の立会い後、調査範囲に安全柵を設定する。工事用基準杭を復元し、それを調査用の座標とし、試掘グリットを設定する。併行して調査用の資・器材の整備を行なったのち、試掘調査に入る。

8月29日～8月31日

試掘グリット掘り下げ継続。比較的保存状態のよいC、D12・13区では、休場層、第1スコリア層まで掘り下げ、上層の堆積状態の把握と先土器時代文化層の確認作業を行なう。あわせて、各試掘グリットの上層堆積状態を写真撮影・図化する。

9月1日～9月9日

試掘調査継続。新たに調査対象地域を東側斜面変換点まで拡げる。先土器時代文化層の確認調査のため、一部、重機を使用して、表土除去したのち手掘りによる調査を行なう。

9月12日～9月17日

先土器時代文化層の確認調査継続。併行して試掘グリットの記録作業を行なう。13日には静岡県開発公社、静岡県教育委員会、長泉町教育委員会、新設高校施工業者による協議が行われた。縄文時代の平面調査を遺跡の西半分とすることが明確にされ、今後の調査と工事についての調整がされた。

9月19日～9月30日

先土器時代の確認調査継続。一部、休場層以下の調査を実施する。

10月3日～10月8日

先土器時代の確認調査を継続する。調査対象地の東側では、先土器時代の遺物は認められず、遺跡の範囲は西側に限定される。一部、縄文時代遺跡（A地区）の表土除去を実施する。



第3図 調査状況図

10月11日～10月15日

A地区の精査開始。この地区は擾乱が著しく、休場層上面まで掘り込まれた遺構を確認する。

10月17日～10月29日

A地区で標準点移動を行なう。検出した遺構の精査を行なう。併行して、図化、写真撮影などの記録作業を実施。

10月31日～11月5日

B・C地区で重機による表土除去。表土除去の完了した部分より基準杭を復元する。A地区の精査続行。

11月7日～11月12日

A地区西側部分の調査完了。全体写真を撮影する。

11月14日～11月22日

B地区の精査に入る。併行して、A地区東側の表土を除去する。西側では、先土器時代の確認調査を行なう。

11月24日～11月26日

B地区は遺物の位置、レベルをおさえながら、精査を継続。A地区精査を行なったのち、写真撮影、図化などの記録作業を実施する。

11月28日～12月3日

A地区的精査完了し、全体写真を撮影する。一部、先土器時代の確認調査を継続する。B地区は精査を進める。

12月5日～12月10日

A地区の確認調査を終了する。B地区では埋壺が発見される。C地区的先土器時代調査。

12月12日～12月17日

B・C地区的精査継続。C地区的完掘したグリットの写真撮影、実測などの記録作業を行なう。

12月18日～12月24日

B・C地区的精査継続。B地区では遺構の記録作業を急ぐ。完了した地区より、全体写真の撮影を行う。B地区については、先土器時代の確認調査を行なう。

12月26日～12月28日

記録作業の補足を行ない、現地調査を終了する。

## 第II章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

海拔1,458mを測る位牌丘を頂点とした愛鷹山は、南東麓では海拔300mで緩傾斜面となって、黄瀬川の形成した谷底平野に続く。また、先端部は、比較的開析のすんだ浅い小支谷を形成し、いわゆる丘陵性台地となっている。この丘陵一帯には、先土器・縄文時代の遺跡が広く分布し、一定のまとまりを示す遺跡群を形成している。

今回、調査対象となった茶木畠遺跡は、下長瀬に分布する遺跡の一つである。長泉町周辺に多くの遺跡の分布する要因のひとつに、遺跡をとりまく自然的・地理的環境があるといわざるをえない。本節では、微視的にみた環境の問題を述べ、さらに遺跡の立地とのかかわりについても触れてみたい。

本遺跡周辺の地形は、大きくは愛鷹山麓という範囲に入るが、縄文時代の遺跡は、いずれも海拔300m以下の緩傾斜面に位置する。これらは、狹長な主丘と開析のすんだ支谷をはさんで支丘が発達している。複雑に入り組んだ開析谷は、それぞれ細い渓流をもって東流し、やがて谷底平野の黄瀬川に合流している。周辺の遺跡の立地をみると、直接、谷底平野を見降す丘陵先端部に存在することは少なく、むしろ、支谷の奥まった位置にある支丘上に位置することが多いといえよう。

茶木畠遺跡の場合も、西側に支谷をもつ丘陵上（東西200mの長狭な平坦面を有する）に位置する。また、この支谷には、湧水または地下湧水をあつめた谷津川があり、黄瀬川の支流、桃沢川に合流する。こうした条件は、一般的にいわれている生活水の確保という点に起因するであろう。おそらく、先に述べた周辺の遺跡立地の共通性についても、この点が重要な要素になっていると思われる。

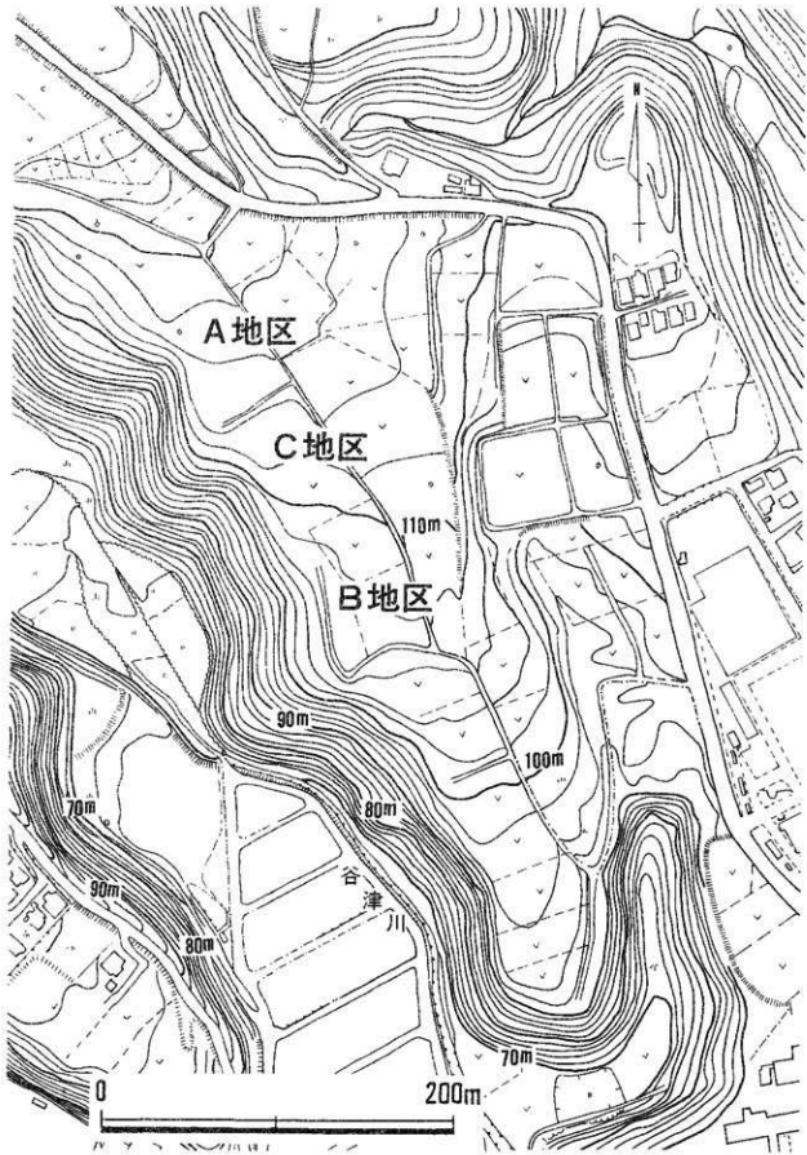
つぎに、海拔300m以下に先土器・縄文時代遺跡が多い点である。現在、この一帯は、畑、住宅地・山林となっており、先土器・縄文時代の様相をかいざみることはできない。当時の生活基盤は、狩猟・採集というきわめて自然に依拠した形態といわれている。具体的な資料に欠けるが、遺跡の立地が海拔300mを境界として変化する事実は、このこととかかわり、そして、狩猟・採集の対象となった動・植物の生態の反映とみることも、許される想定ではないだろうか。

### 第2節 歴史的環境

#### (1) 長泉町周辺の先土器時代

愛鷹南東麓の先土器時代の遺跡は、海拔300m～50mの丘陵上に分布する。当時、日本列島を含め北半球では氷河期（ヴュルム氷期）をむかえ、現在の海岸線よりマイナス百数十mほど低い位置にあったといわれ、愛鷹南東麓は、落葉広葉樹林帯の平原地帯であったことが想定される。<sup>註1</sup>

現在、この時代の遺跡は、長泉町内で14ヶ所を数え、当時の生活空間としては、好条件をそなえていたことを知ることができる。このうち、9ヶ所の遺跡が発掘調査され、西願寺遺跡第3スコリア層からは頁岩製の剥片が<sup>註2</sup>、さらにイラウネ遺跡第3黒色帶からは頁岩製のナイフ形石器や剥片が発見されている。<sup>註3</sup> 現状では、西願寺遺跡出土の剥片をもって、長泉町内の先土器文化の上限とし、イラウネ遺跡出土のナイフ形石器等が後続するといえよう。なお、西願寺遺跡の第2黒色帶土層からは、剥片や碎片の集中するA～Eの5つのブロックが発見され、イラウネ遺跡では、第2文化層（第1黒色帶）からナイフ形石器、削器、剥片、碎片の集中する5つのブロックが発見されており、当時の生活空間の一端を知ることができた。



第4図 遺跡地形図

このほか、調査された平畦、陣場上、上野、八分平B、中尾、イラウネ（第1文化層）は、休場層中に文化層が発見されている。<sup>註4</sup> 上野遺跡では炉跡が、そのほかの遺跡についても、ブロック等が発見され、ナイフ形石器や削器、台形石器、尖頭器なども発見されている。長泉町内の先土器時代では最も充実した資料をえている時期といえよう。これらの遺跡から出土した石器をみると、ナイフ形石器が盛行する時期の遺物が多く、それ以降の尖頭器、細石刃文化の遺物は表面採集遺物があるのみで、発掘調査されていない状況にある。

## （2）長泉町周辺の縄文時代

日本列島にはじめて土器を作った文化がはじまった頃、北半球では徐々に気温が上昇し、それにともなって、しだいに海面が上昇するきさしがはじまつた。その頃、使用された代表的石器に有舌尖頭器があり、長泉町周辺においても、表面採集によって発見されている。しかしながら、伴出する土器の有無等いくつかの課題もあって、今後の調査に待つところが大きく、単に、先土器時代から縄文時代の初めにかけて、連続して足跡が追えることを指摘し、ここでは調査例の豊富な縄文早期の遺跡について触ることとしたい。

長泉町内の縄文早期の遺跡は、先土器時代遺跡とほぼ共通する立地条件であつて約20ヶ所を数える。このことは基本的な生活条件にあまり差異がみられず、生活空間として好条件をそなえていたものと推定される。発掘調査され、もっとも状況の把握された富士石遺跡からは、堅穴住居跡、堅穴造構、集石などが発見され、集落の一端を知る手がかりを得た。発見された堅穴住居跡から炉跡と考えられる焼上ブロックや焼石が発見された。出土した石器のうち、磨石273点、石皿23点、石鏃10点などがみられ、<sup>註5</sup> 植物質食料採集の依存度がかなり高いことを推定させた。

つぎの縄文時代前期に入ると、いわゆる縄文海進と呼称される海進活動が顕著となる。長泉町内では、早期の遺跡数に比較し、著しく減少する時期である。

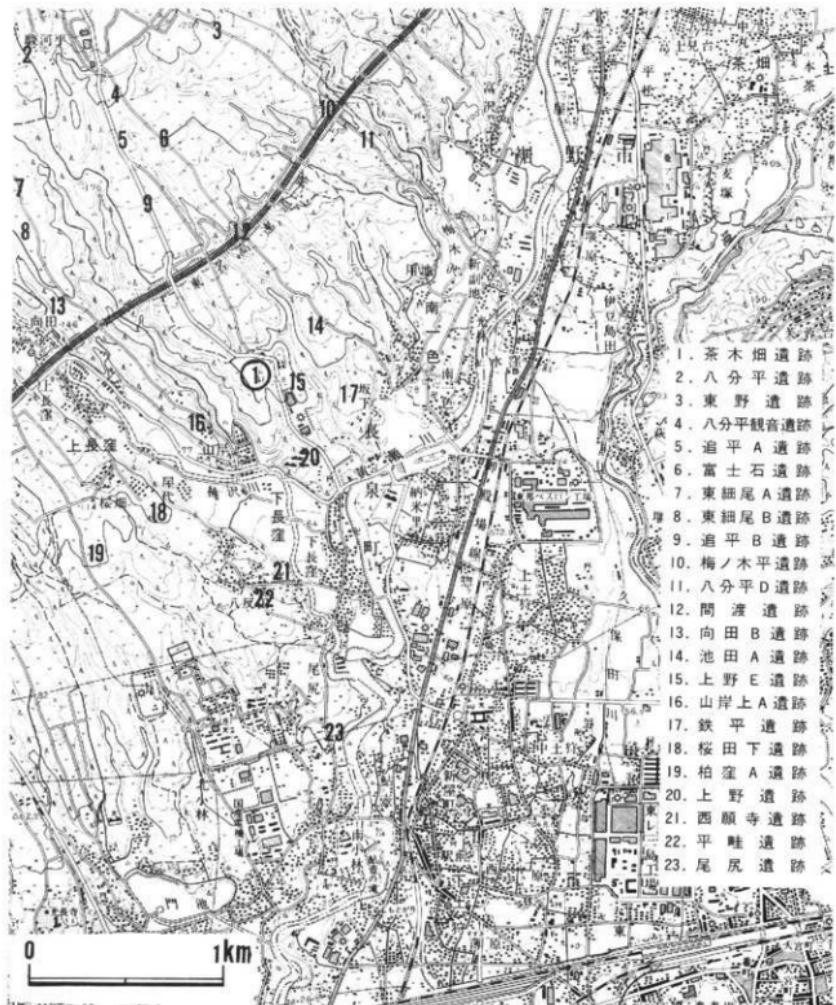
調査された柳ノ木遺跡からは堅穴住居跡2軒が発見され、出土した土器から早期末～前期初頭とされた。他の遺跡では、この時期の単独遺跡はみられず、発掘調査された遺跡においても、わずかな比率で前期の上器が含まれるという様相を呈している。<sup>註6</sup> このことは、先土器時代以降、展開してきた営なみの中で大きなヒアタスと呼ぶべき現象をみせている。先にふれた縄文海進という環境の変化と短絡的に結びつける訳にはいかないにしても、何らかの反映とすることも許されるのではないだろうか。

縄文海進によって海岸線の前進が最高潮にたつし、その後、しだいに後退していく。まさに、縄文中期初頭はこの後退がはじまりつつあった時期だといわれている。

この時期になると、長泉町周辺に再び遺跡は増加する。かつて、長谷川豊氏は当該期の遺跡立地について触れ、前期末～中期初頭と連続して営なまれる遺跡の少ないと、県内においても、愛鷹山南東麓に比較的濃密に遺跡が分布すること、生活拠点と呼ぶべき遺跡以外、発見される遺物は少なく、遺物を構成する石器のバラエティも貧弱である点を指摘した。<sup>註7</sup>

4次にわたって発掘調査された柏塙遺跡の場合、住居跡など生活状態を直接示す遺構は明瞭ではなかったが、土坑、溝とともに土器片、石鏃、磨石、打製石斧が多量に発見された。こうした石器組成をみると、植物質食料の採集とともに、狩猟の依存度も高いという生業形態が推定され、愛鷹山南東麓地域の自然を背景とした生活形態をしのばせるものがある。<sup>註8</sup>

中期中葉から後葉は、中部山地や関東地方にかけて、多くの遺跡が形成され、発展期の様相をもつ時期である。この地域においても、中峰遺跡にみられるように26軒の堅穴住居跡が発見され、<sup>註9</sup> 長期間、集落が営なれたことを推定させている。また、出土した石器の組成では、打製石斧や磨石、石皿が多く認められ、植物質食料の採集を中心とした生業形態をうかがい知ることができる。なお中期初頭



第5図 周辺遺跡分布図

以降、この時期まで連続した遺跡が少ない点は、中期初頭と中期中・後葉との間に、若干のヒアタスを考慮すべきかもしれない。

はなばらしい展開をみせた中期繩文文化も、この地域では後期に入ると急速に衰退はじめる。時あるとも、繩文海退によって、関東・東北・東海西部地方に、潟湖が形成され、多くの貝塚がみられる時期である。

長泉町周辺では、上野E・南一色池田、間渡遺跡で、わずかに後期前葉の土器が発見され、中葉に入ると、南一色池田遺跡に土器が認められるのみである。<sup>註10</sup>

現状では、後期後葉から晩期末まで明瞭な遺跡・遺物は確認できず、この地域は無人の山野と化してしまうかも知れないのである。

## 註

註1 鈴木忠司『先土器時代の知識』1984年

註2 平林将信 他『西願寺遺跡（A地区）・長久保城址（二の丸）』1978年

註3 平川昭夫『中尾・野台・イラウネ』1984年

註4 平林将信 他『陣場上・平畠遺跡』1976年

秋本真澄 他『下長窪上野遺跡』1979年

平川昭夫 他『八分半B・富士石遺跡』1981年

註5 平川昭夫 前掲書1981年

註6 小野真一・笛津脩洋「駿東郡長泉町梅ノ木平遺跡発掘調査概報」「埋蔵文化財調査報告書」1968年

註7 長谷川豊「遺跡の分布と立地について」「静岡県考古学会シンポジウム4」1980年

註8 佐藤達雄「駿東郡長泉町柏庄遺跡の調査」「静岡県文化財調査報告書」第16集 1977年

中野國雄・平川昭夫「柏庄遺跡発掘調査概報」1980年

註9 小野真一 他「上長窪遺跡群」1971年

註10 静岡県教育委員会『静岡県遺跡地名表』1979年

## 第III章 遺構

### 第1節 土層

#### (1) 愛鷹南東麓に見られる火山灰の層序

愛鷹南東麓には台地状の平坦な尾根が、浅い谷をしたがえて、南東にのびる。この尾根にみられる露頭には、愛鷹火山の泥流ないし火山砂礫層の上に、15mほどの厚さで、粘土化の進んだ火山灰層がみられ、愛鷹ローム層、と呼ばれる。その層序等については加藤芳朗氏ら、同ローム層中の埋没腐植層のC14年代についても加藤芳朗氏らの報告がある。

発掘調査地点を含め、愛鷹南東麓にみられる愛鷹ローム層には、第6図3の模式断面図にみられる層序区分と鍵層がみられる。

以下、表層の現生腐植質火山灰層、上部ローム、中部ロームにみられる火山灰層とその降下年代、遺跡出土層準を決めるにあたっての問題点等を、各層準ごとに述べる。

1. 現生腐植質火山灰層：表層の現生腐植質火山灰層には、黒色ないし、黒褐色腐植土層中に第1図2の地質柱状図のように、砂沢（ズナザワ）ラビリ（Zu）、カワゴ平バミス（Kgp）、アカホヤ火山灰（AH）が認められる。発掘調査地点では、砂沢ラビリやアカホヤ火山灰などは富士東麓に比べて薄く、細粒で確かにいく。天城火山起源のカワゴ平バミスは纖維状に引きのばされ、白い斑点となって、幅広い層準に分散する。砂沢ラビリとカワゴ平バミスの層準には、他に2、3種類のスコリアが散在するようみえる。

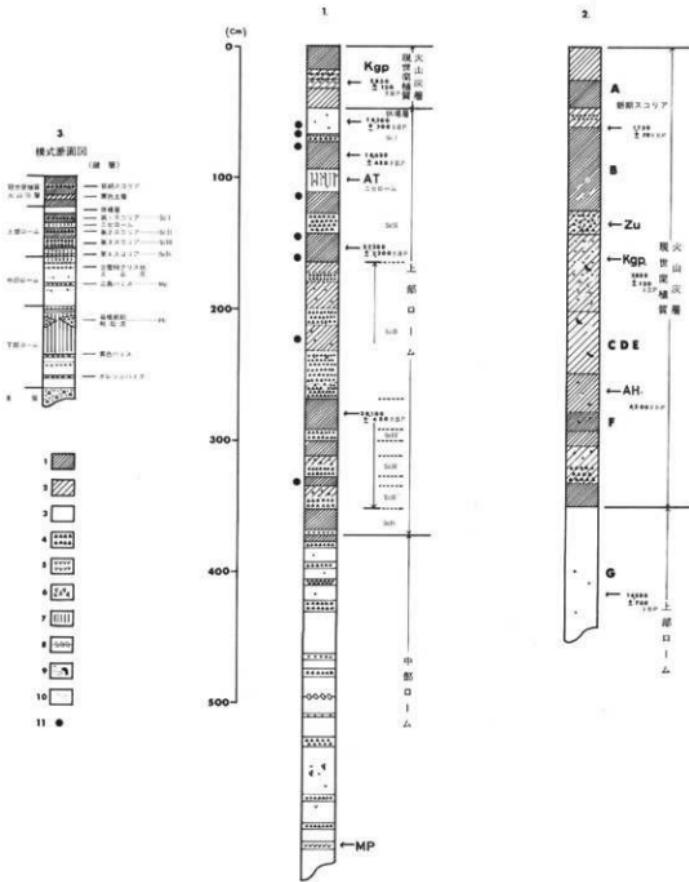
アカホヤ火山灰（AH）の降下年代は、各地のC14年代では、およそ6,300y.B.P.を示す。愛鷹南東麓におけるアカホヤ火山灰の層準は、第6図2の現生腐植質火山層のF層の上位にあると考えるが、正確には、鉱物組成の分析にまたなければならない。下層は、上下の暗黒褐色土層を含め、富士黒土層、にあたると考える。表土直下の黒土層中に新期スコリアがみられるが、大瀬スコリア相当と考える。

各時代の遺跡層準は、C14年代等によって降下年代の推定される鍵層と、出土遺物の内容との組み合せによって決まるが、調査地点付近では、第6図の2の柱状図のA～Fで示されるものと考える。調査地点の現生腐植質火山層は厚さ1mにも満たないが、踏査の結果では、同様の結果が期待できる。詳しく述べる。

2. 上部ローム：上部ロームには、黒色帯、スコリア層（帶）やクラック帯が何枚も発達し互層するのがみられる。なかでも、休場層、第1スコリア、ニセローム、第2スコリア、などの鍵層は明瞭に観察される。

鍵層のうち、ニセロームはその中央部に、姶良カルデラ起源の火山ガラスを挟む。この火山ガラス降下年代は、各地での測定結果からみて、23,000y.B.P.前後とされる。また、上部ロームの堆積年代の指標として、休場層の木炭、黒色帯の腐植酸を用いた14C年代測定値が得られており、その値は、第6図1の柱状図に付記した。

先土器時代の遺物、礫群などの出土層準のうち代表的な層位は、第6図1の柱状図に黒丸印を付記して示した。最近では、第3スコリア帯Sc IIIの層準から第4スコリアSc IVの層準にかけての黒色帯からの遺物・礫群の出土がみられ、注目を集めている。愛鷹南東麓では、第3スコリア帯Sc IIIの下位に3枚のスコリア層、第6図1の柱状図に示したSc III'、Sc III''、Sc III'''が顕著に発達する。現在、最も古いとされる礫群・遺物は、Sc III' と Sc III''' の間の黒色帯より出土している。そこで、第3スコリア



第6図 愛媛南東麓の表層地質断面図

帶 ScⅢ から第 4 スコリア ScⅣ までの土層の細分化、土層の命名、中部ロームとの境界の判定について作業をすすめる必要にせまられている。この作業には、遺跡の立地条件の問題がからむ。つまり、上部ローム中に、先土器時代の礫群・遺物を何層にもわたって出土するような調査地点の多くは、愛鷹南東麓を南東方向にのびる台地状の幅広い尾根の両端にあって、谷に向って下る斜面にかかるぎりぎりの平坦面に集中している場合が多い。これらの地点では、多くの場合 tephra の垂れ下がりが認められ、第 3 スコリア帶 ScⅢ の上下の tephra が欠如したり、薄く不明瞭になるので、中部ロームとの境界の判定も含め、土層の判定には注意が必要となる。

3. 中部ローム：中部ロームは割れ目の少ない褐色塊状のローム層で、厚さ 5 ~ 10cm くらいのスコリア層を多数はさむ。現生腐植質火山灰層は、新期の富士火山の tephra の集積したものであり、上部ローム・中部ロームの大部分は古富士火山を起源とする tephra の集積したものと考えられている。しかし、中部ロームの中部には、箱根火山の中央火口丘の活動に伴なう黄褐色をした軽石で黒緑色の輝石の斑晶をみる。\*三島バミス(MP)を挟む。下部ロームの箱根新期軽石流をはじめとして、下層ほど箱根火山起源の火山灰や火砕流をみる。

発掘調査にあたっての問題点は、上部ロームとの境界を正確に決めることにある。中部ローム上限のよく連続する 1 組のスコリア層を指標とする方法は、中部ローム三島のバミス(MP)層準まで掘り下げる発掘方法とあいまって、有効と考える。

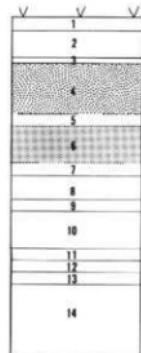
## (2) 遺跡の基本土層

茶木畠遺跡の層位についてはつぎのように整理した。

1. 表土および旧表土層
2. 砂沢スコリア層
3. 栗色土層
5. 富士黒色土層（本遺跡では明瞭ではない）
6. 休場ローム層
7. 休場ローム下層
8. 黄褐色スコリア層（第 1 スコリア）
9. 黒色土層（第 1 黒色帯）
10. 黄褐色スコリア層（ニセローム）
11. 黒色土層（第 2 黒色帯）
12. 黄褐色スコリア層（第 2 スコリア）
13. 黒色土層（第 3 黒色帯）
14. 黄褐色スコリア層（第 3 スコリア）

以上の土層については、一般的には 1、2 層は弥生時代以降の文化層、4 層は縄文時代中・後期の文化層、5 層は縄文時代早・前期の文化層、6 層以下が先土器時代の文化層と考えられている。

このうち、本遺跡の場合、4、6 層において遺物が出土しており、遺物包含層として確認された。なお、6 層における遺物の出土は、上位であった。7 層以下では、先土器時代の遺物は確認できなかった。また、本基本土層を前項の火山灰層序に比定すると、1 ~ 5 層は現生腐植質火山灰層に、6 ~ 14 層は上部ローム層ということになる。



第 7 図 土層模式図

## 第2節 先土器時代

先土器時代の遺跡では、石器などの遺物が、ブロックとかユニットとか呼ばれるような一定範囲のまとまりで集中的に出土することは広く知られるところである。ところが、本遺跡では、むしろ、尖頭器を中心とした遺物が集中することなく、単独で出土した。また、石切りかや礫群、炭火物集中箇所は認められなかった。

遺物とその出土状態をみると、石器の組成のうえで、尖頭器、有舌尖頭器が多い。ついでナイフ形石器、彫器、石錐が認められるがその量は少ない。また、石核の少ないとても石器の組成と相通する現象といえよう。出土状態では、休場層上から、木葉形を呈する尖頭器と剥片が出土したのみで、そのほかの遺物は栗色土層下位、またはそれより上位で遊離した状態発見された。念のため、これらの石器の発見された区域を第1スコリア層まで掘り下げたが、遺物は発見されなかった。このような出土層位からすれば、先土器時代の遺物はB・C地区において単独出土がいくつかみられたといわざるをえない。また、発見された個所は、地形上、緩傾斜面であるが、とくに、周囲より微高地状を呈する箇所から発見されてはおらず、微地形上、本調査区域の内で縄文時代の遺跡立地ととくに異なる点はみられなかった。

## 第3節 縄文時代

### (1) 調査区の概観

A地区については、調査前の植栽樹木により包含層の栗色土層がかなり擾乱を受けており、多くは休場ローム層まで達している遺構の残存状況を確認するにとどまった。

発見された遺構は土坑92ヶ所、焼土10ヶ所を発見したが、調査区の北側に多く分布し、中間は希薄であって、南側ではやや散漫な状況で分布する。

また、これらの遺構に伴なって発見された遺物は、土器片、石器であったが、土器片は細片が多く、石器は定形石器は少なかった。いずれも量的には少ない。

B地区については、包含層中の遺物は数ヶ所にまとまって出土した。しかしながら、この土層中では、遺構は明確にしえず、休場層上位まで掘り下げ検出した。この結果、土坑55ヶ所、焼土5ヶ所、埋甕3ヶ所を発見した。この地区で発見された土器片、石器には大破片や定形石器も多い。

### (2) 遺物の出土状態と遺構

A地区では、上器片や石器片がわずかに発見されるにとどまり、その在り方も散在的であり、原位置をとどめていないと判断されるものが多い。それに比べ、B地区は縄文時代の遺物包含層の栗色土層も安定して残っており、原位置と判断されるものと理解された。遺構との関連で遺物が集中する個所は、つぎのようになる。

#### 埋甕2周辺

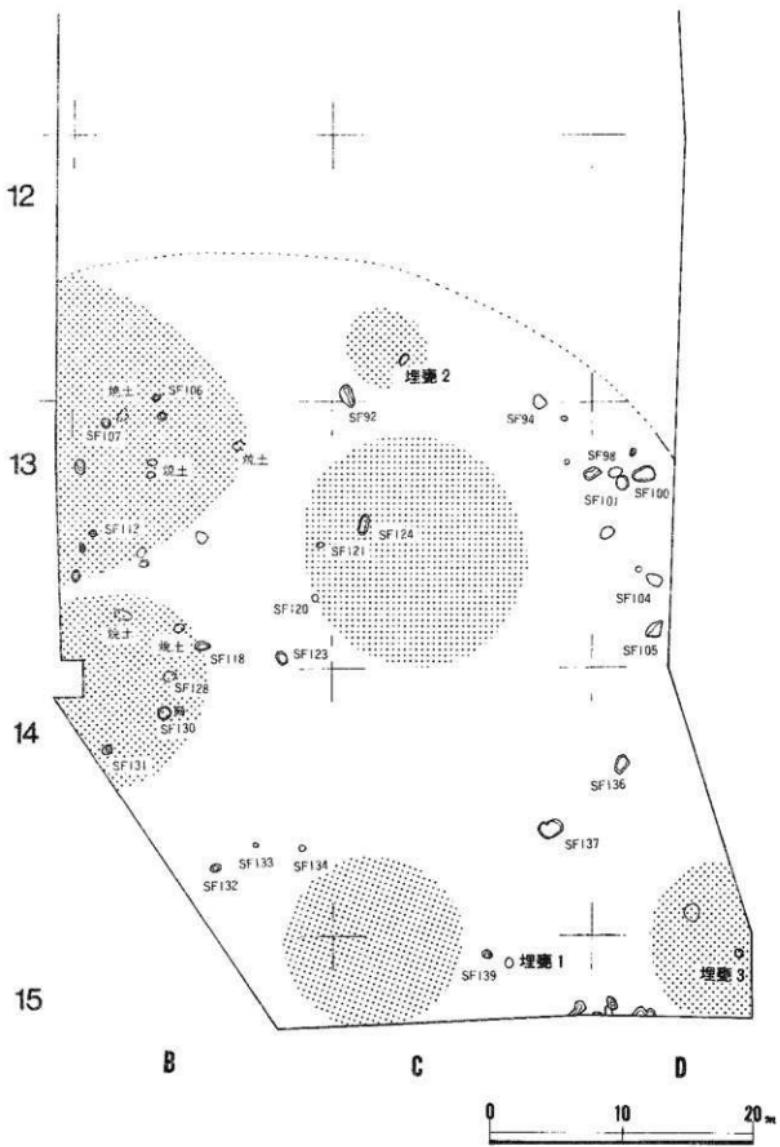
打製石斧、磨石が多い。土坑93周辺では土器片が半径3m前後の範囲で認められた。

#### 土坑124周辺

打製石斧、磨石、大珠が発見されている。埋甕1ヶ所が確認されている。土器片についても半径10m前後の範囲で認められた。打製石斧の多く出土したことから、生産にかかわる区域として利用されたとすることも推定できよう。

#### 土坑128～114周辺

半径11m前後の範囲で上器片が集中して発見された。それに比べ、石器類の出土状態は、北側に打製



第8図 B地区全体図

石斧や石匙の集中する区域があるが、分布の範囲がやや散漫である。なお、焼土が3ヶ所から発見されている。

#### 土坑 128～131 周辺

半径8m前後の土器集中箇所が認められたが、それに比べ、石器は、石斧、磨石が散在的な在り方で出土した。焼土は2ヶ所が認められた。

#### 埋甕 3 周辺

半径6m前後の範囲で土器集中がみられた。他の集中箇所に比べやや散漫で石器の出土も少ない。

#### C 14区

埋甕1からやや離れた西側で土器集中がみられた。石器類の伴出も認められなかった。

また、土坑94から105付近では土坑の発見例の多さに比べ、遺物の集中はみられず、性格の異なる土坑群と推定できよう。

### (3) 土 坑

発見された土坑は、長径、深さにおいて特に、A、Bの調査区で異なる点も認められず、ここでは、一括して記述をすすめてみたい。

なお、形態については、円形、楕円形を呈するものが多く差異は認めがたいので、以下、覆土の差異によっていくつかに分類することとする。

#### 土坑 a 類

黒色土・黒褐色土を覆土とする。長径2.2m～0.46m、短径1.7m～0.36m、深さ0.44～0.13mを測る。出土遺物を伴わないものが多く、土坑23より底部に近い位置で小破片が出土した。土層の堆積状況をみると、レンズ状堆積を示すものと一層で堆積したものがある。

#### 土坑 b 類

覆土中に焼土ブロックを伴うもので、あるいは炉穴として使用された可能性のあるものも含まれている。長径1.05m～0.45m、短径0.75m～0.39m、深さ0.2m～0.1mを測る。他の土坑に比べ、小規模なものが多いのも特徴であろう。また土坑30、土坑60、土坑90のように、土坑を埋める際、焼土面の一部をこわしたと考えられるものも含まれている。

また、土坑74のように、底面に焼土ブロックが認められ、それより上位の土層に炭化物や焼土粒子を含んでいるものは、炉穴と判断されよう。伴出した遺物は少ない。

#### 土坑 c 類

覆土中に栗色土や暗褐色土を含む。土器片や石器片が少量ながら含まれ、土坑139のように石皿片を伴うものも認められた。この土坑の覆土は、暗褐色土上一層のみで、石皿片とともに埋められたと判断された。長径1.9m～0.8m、短径1.5m～0.65m、深さ0.35m～0.1mを測る。

土坑をa、b、cのタイプに分かち述べてきた。b、c類は、焼土ブロックや、わずかではあるが、伴出遺物をもつことから、後述する土器の年代、縄文中期前葉と判断される。また、a類については、伴出遺物が少ないとあって時期を明確にしがたいが、底部に近い位置から土器片が出土したものもあり、やはり縄文中期前葉と考えておきたい。

### (4) 埋 甕

#### 埋 甕 1

C-15-1区から発見された。0.9×0.85mの円形を呈する土坑内に、底部を欠いた波状口縁の深鉢

を埋置してあった。土器は土坑内北西隅から発見されたが、出土状態をみる限り、北側からの土圧で横転したと考えられる。このように考えられるとすれば、土坑内は土器埋置当初、人為的に埋め戻されず、流上の土圧によって横転したと考えることもできよう。なお、長径50~35cm、厚さ15~10cmの偏平な岩が作出している。このうち、1側には一面に磨面が認められる。中央部を凹めておらず、縁辺をもたないため、石皿とは呼称できないので、大形磨石とされるものであろう。土坑の覆土は栗色土層であった。

#### 埋甕 2

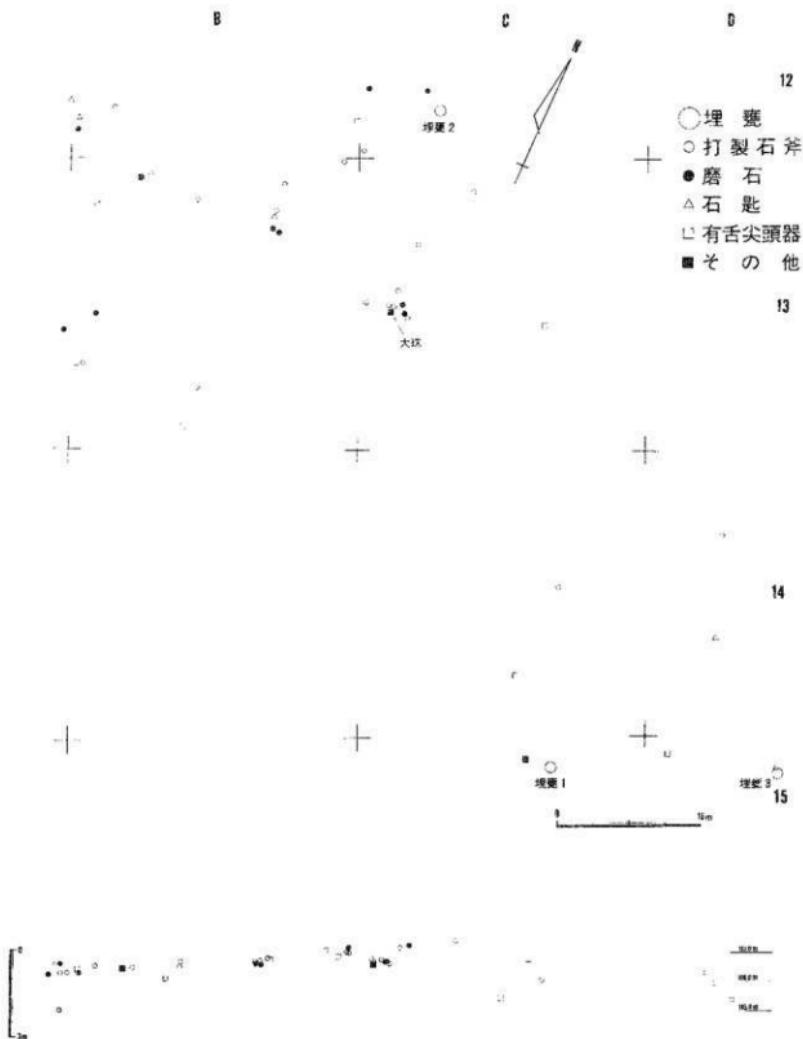
C-12-I区から発見された。0.85×0.83mの円形を呈する土坑内で底部を欠いた平縁の深鉢が埋置してあった。土坑は土坑内のほぼ中央から発見された。上器は正位窪に埋置した状態で発見されたため、土坑内に土器をすえたあと、埋土をしたものと判断される。口縁部の破損状況からすれば、口縁部のみ、地表面に露出していた可能性もある。覆土は栗色土層であった。

#### 埋甕 3

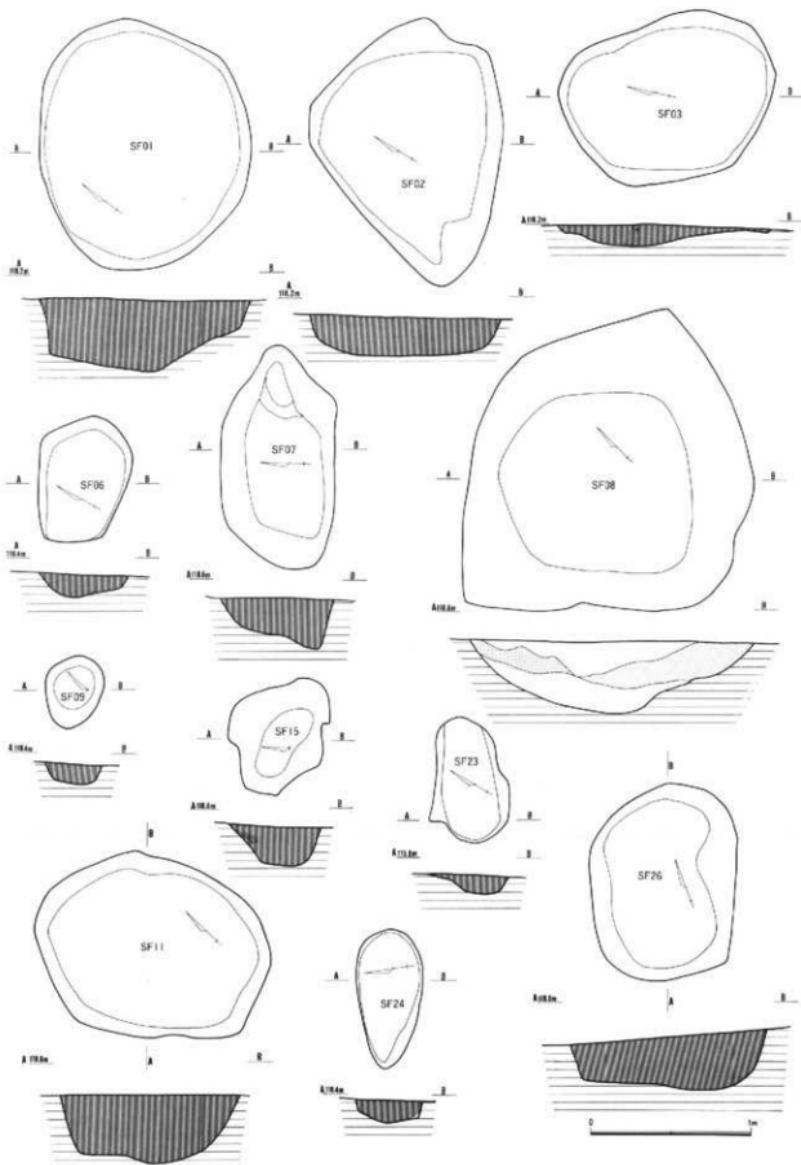
D-15-I区から発見された。土器は口縁部から上胴部を欠き、周辺からも欠損した破片と思われるものは発見されなかった。

平面では土坑は発見されなかつたが、土層断面では、東側で10cm程、栗色土が落ち込んでいるので、浅く小さな穴を掘って土器をすえ、埋土をしたと推定される。

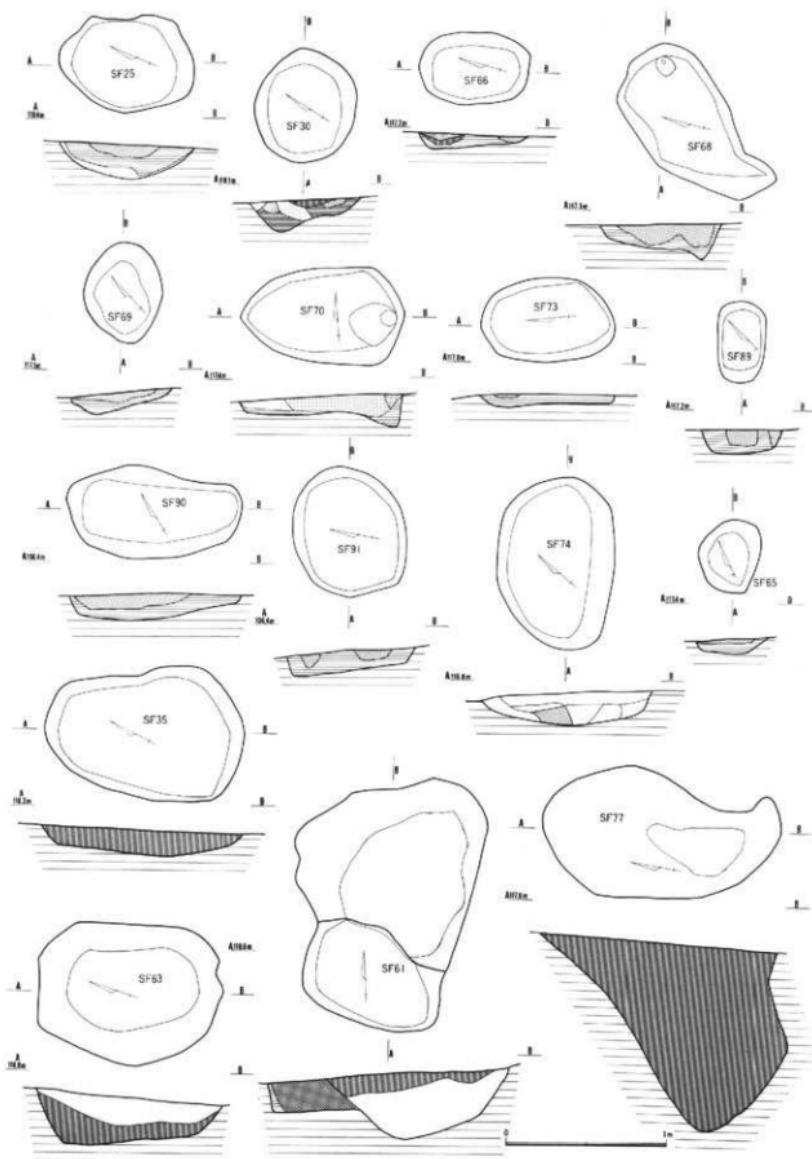
埋甕3ヶ所はいずれもB地区から発見された。位置からすれば、それぞれ独立している。また、B地区で発掘された土坑との関係も明確にできなかつた。



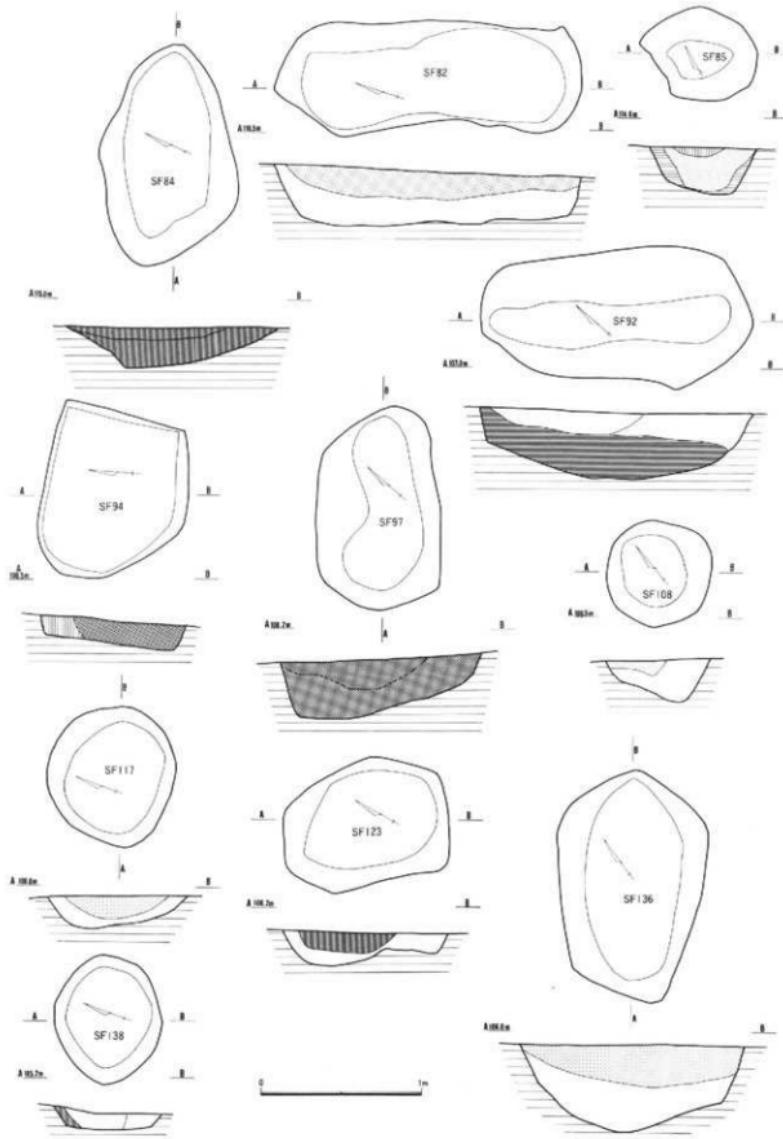
第9図 B地区出土石器分布図



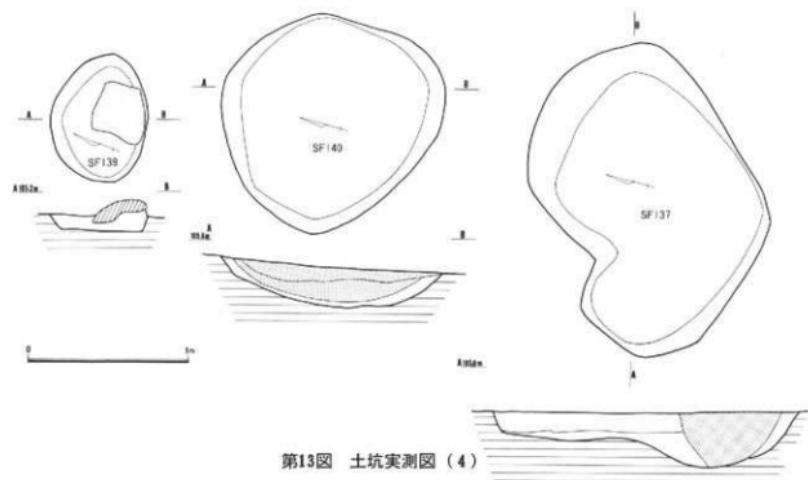
第10図 土坑実測図（1）



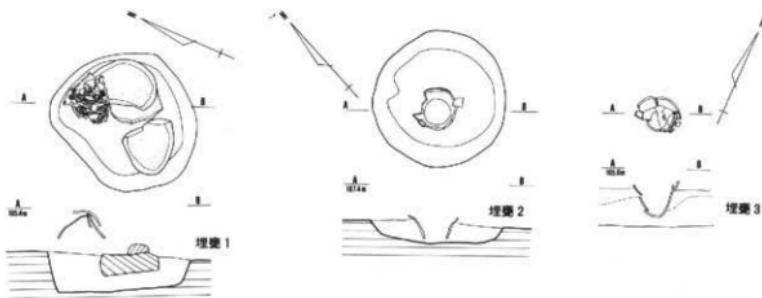
第11図 土坑実測図(2)



第12図 土坑実測図 (3)



第13図 土坑実測図 (4)



第14図 埋壺実測図

## 第IV章 遺 物

### 第1節 先土器時代

先土器時代の石器は、尖頭器 7 点、有舌尖頭器 7 点、ナイフ形石器 2 点、削器 2 点、石核 2 点が発見されている。

#### 尖頭器（第15図 1～7）

形態、法量、製作技法の差異によって、3 類に大別される。

##### A類（1）

いわゆる木葉形を呈するものをこの類とする。基部の一部をわずかに欠損し、長さ 101mm、巾 42mm、厚さ 10mm、重さ 47g を測る。両面に押圧剥離による丹念な調整が加えられている。黒耀石製である。

##### B類（2～5）

いわゆる細身の柳葉形を呈するものをこの類とする。完形のものと欠損するものがある。形態の特徴からすれば、先端下位に最大巾をもつ例と中位に最大巾をもつ例がある。欠損例をのぞく長さは、97mm～78mm、巾 31mm～24mm、厚さ 10～7mm、重さ 23.6～15.2g であるが、欠損例は、むしろ、長さ 100mm 前後、重さ 50～40g 前後と推定され、木葉形尖頭器に近い法量をしめすものと判断される。いずれも、両面に押圧剥離による調整加工が加えられているが、その加工には精粗の違いがみられる。黒耀石・玄武岩・石英安山岩製である。

##### C類（6・7）

いわゆる石鎚形を呈するものをこの類とする。(6)は略五角形を呈し、片面に凹窪部の加工を施す。長さ 43mm、巾 31mm、厚さ 8mm、重さ 8.6g を測る。(7)は細身で略一等辺三角形を呈し、押圧剥離によって丹念に加工がされる。長さ 41mm、巾 14mm、厚さ 3mm、重さ 2.4g を測る。黒耀石・珪質頁岩製である。

#### 有舌尖頭器

形態、法量、製作技法の差異によって 2 類に大別される。

##### A類（第15図 8・10・12～14）

舌部が身部に対し水平に近い状態に付き、基部端が明晰なものをこの群とする。舌部は端部に近くなるにつれ、巾狭くつくる。舌部とともに丹念な調整剥離が加えられている。長さ 75mm～47mm、巾 19mm～15mm、重さ 7.9～4.2g を測る。玄武岩製である。

##### B類（9・10）

身部から舌部がゆるやかにつらなり、茎部端を丸くおさめているものをこの類とする。舌部は身部に比べ巾狭くつくる。長さ 58～44mm、巾 19～14mm、重さ 3.2g～2.7g を測る。頁岩製である。

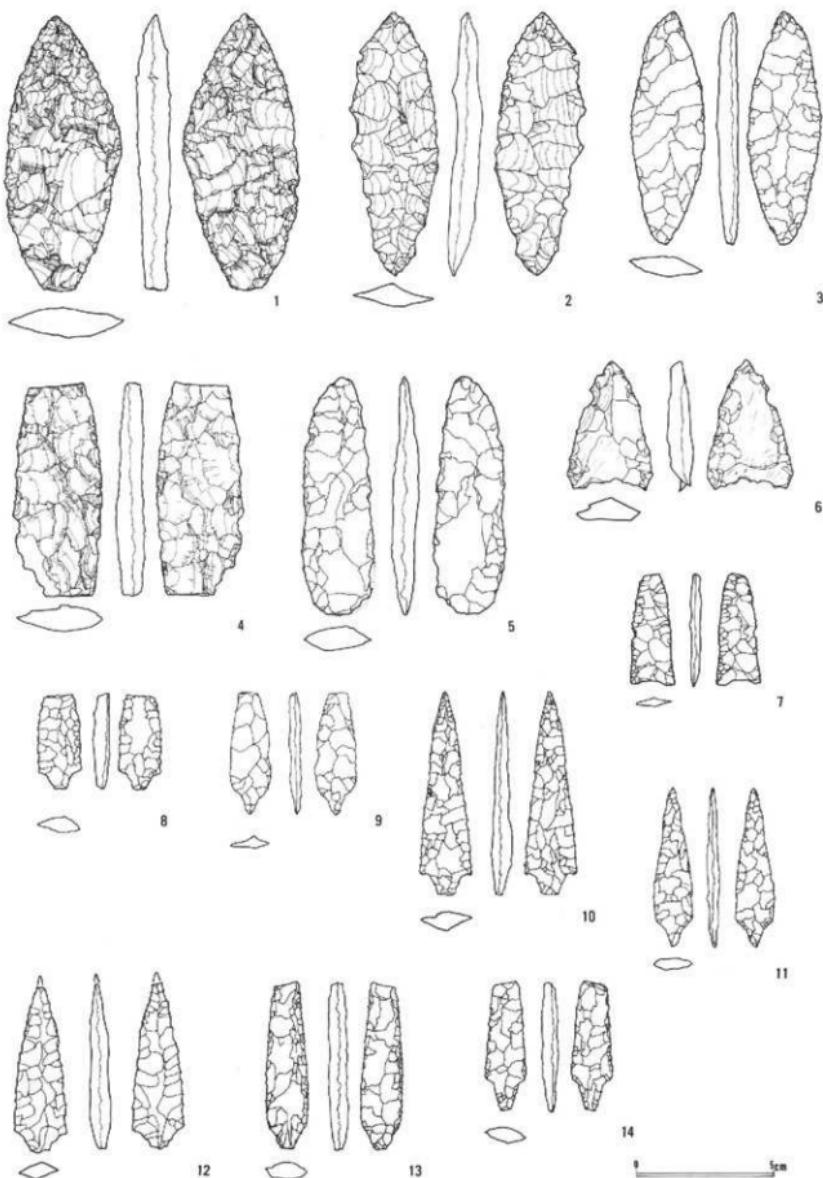
#### ナイフ形石器（第16図 1・3）

(1)は 1 側縁に刃溝し加工を加え、身部の片側縁に素材の鋭い縁辺を残している。(3)は、茎部の両側縁を刃溝し加工によって調整され、身部の両側壁に素材の鋭い縁辺を残している。長さ 38mm～32mm、巾 23mm～22mm、厚さ 7mm を測る。いずれも黒耀石製である。

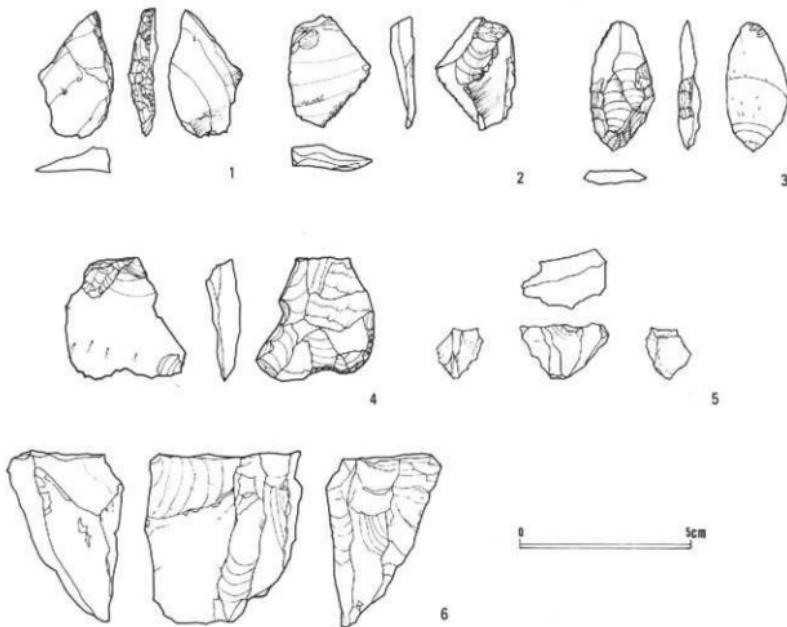
#### 削 器（第16図 2・4）

1 側縁に連続した調整剥離を加えている。形態は台形、不定形を呈する。長さ 50～32mm、巾 47～23mm、厚さ 12mm～7mm を測る。黒耀石製である。

上端に打点が設けられ、背面に数個の剥離面をもつところから石核と判断した。形態は円錐体を呈す



第15図 石器実測図 (1)



第16図 石器実測図

るものと角柱状を呈するものがある。長さ50~15mm、巾44~25mm、厚さ32~13mmを測る。黒耀石製である。

第1表 石器計測値一覧

No	整理	名 称	出 土 地 点	長さ×巾×厚さ (mm)	重さ (g)	材 質
1 - 1	396	木葉形尖頭器	C-8-I 休場脇	101×42×10	47	黒耀石
2	368	"	E-6 休場脇	97×31×8	23.6	"
3	397	"	B-12-III 栗色下位	85×25×7	15.2	玄武岩
4	399	"	F-6 表採	78×31×10	26.6	石英安山岩
5	398	"	F-3 表採	87×24×8	19	玄武岩
6	384	"	表採	43×31×8	8.6	黒耀石
7	385	"	B-13-II 栗色下位	41×14×3	2.4	珪質頁岩
8	407	有舌形尖頭器	B-13-IV "	34×15×6	3.7	玄武岩
9	405	"	B-12-III "	44×16×4	6.9	頁岩
10	402	"	C-14-III "	75×18×7	3.2	玄武岩
11	403	"	C-13-III "	58×19×4	6.9	珪質頁岩
12	383	"	E-3 表採	60×14×5	7.9	玄武岩
13	404	"	C-7-III "	61×15×6	4.2	"
14	406	"	B-15-II 栗色下位	47×15×6		"
2-1	400	ナイフ形石器	C-8	38×22×7		黒耀石
2	159	削 器	B-13-IV 栗色下位	32×23×7		"
3	282	ナイフ形石器	A地区 表採	38×18×7		"
4	408	削 器	H-3 表採	50×47×12		"
5	157	石 核	B-14-IV 栗色下位	15×25×13		"
6	63	"	B-13-I "	50×44×32		"

## 第2節 繩文時代

縩文時代の遺物は大別して、上器、石器に大別される。このうち、石器は、定形石器のほか、剥片、チップなどを含むものとする。

### (1) 上 器

土器は、整理用ボリコンテナーに40箱出土した。この中で埋甕に使用された例は、保存状態が良好であるので、やや詳しく述べてみたい。なお、上器の記述は、以下のように第I～V群に分類してすみてみることとする。

#### 第I群

爪形文を主な文様構成とする上器で、a～dに細別した。

##### 第I群a類（第17図1～20）

口縁部あるいは口縁部に近い位置に連続爪形文を施すグループで、爪形文の両端が丸く弧状をなし、C字形、逆C字形を呈するものをa類として一括した。

口縁部の断面をみると、外反する例と内湾気味の例があって、端部もやや尖り気味のもの(1)、(7)と丸くおさめるもの(2)、(3)、(5)、(8)、(9)がある。形態は平縁が多く(23)のように波状口縁は少ない。なお器形は大半は大半が深鉢で、波状口縁の内側に渦巻状に文様帯をもつ土器は浅鉢である(6)。

文様構成をみると、基本となる爪形文は、口縁部もしくはその下位に小隆帯を貼付したのち施されるが、施文具は、半裁竹管による押引きによるものと刺突によるものほか、ヘラ状工具による場合も認められる。小隆帯はいずれも棒状を呈する。色調は、赤褐色、暗茶褐色を呈して、胎土は金雲母を含みやや砂質をおびる。

##### 第I群b類（第17図21～22）

縁状の低い隆帯を貼付し、口縁部に2段の爪形文を施すものをb類とした。なお、(21)・(22)は同一個体と考えられる。器壁の厚さは6mmを測る薄手の土器で、胎土中に1～2mmの長石粒を含むが金雲母はほとんど含まれていない。色調は淡黄褐色を呈し、焼成も堅緻であるなど、他の土器とは異なった印象を受ける土器である。

##### 第I群c類（第17図23～37）

爪形文の構成が円形や隅丸方形、長方形に施される例をc類として一括した。内面を円形に施された文様を施す例は、浅鉢である。また、長方形、隅丸方形に低い隆帯を貼付して区画し、その上に施文する。また、この区画内をヘラの沈線で埋めるものもみられる。しかし、このグループには、文様構成上縄文と組合さった例は少ない。色調は赤褐色～暗茶褐色を呈し、胎土中に金雲母が含まれ、砂質をおびる。

##### 第I群d類（第18図1～6）

爪形文の単位が弧状をなさないで直線に近いものをd類として一括した。内面を円形に文様を施す例は浅鉢と考えられる。ほかに、直線的に3～5段、爪形文を施すものがある。色調は赤褐色を呈し、胎土は金雲母、長石粒、石英粒を含んで砂質をおびる。

#### 第II群（第18図7～50）

いわゆる細線文土器群で、従来、分類されてきたものより、若干、太日の沈線も含んでいるが、文様構成上、縦位、横位と斜格子状に沈線文を主なモティーフとしている。

口縁部破片をみると、やや肥厚させ、外反気味につくられている。施文具は、半裁竹管、棒状施文具いずれとも判断できないものがある。即ち、棒状施文具でよく沈線を施しており、淡黄褐色を呈し器壁の厚さも15mmを測るなど、やや特異な土器であるが、一応、本群におさめておく。

文様構成をみると、縦位に沈線を施すグループは、やや粗い間隔で施しられているにくらべ斜格子文のグループは、密で細かい間隔で施されている。また、この斜格子文のグループは、**図19**のように円形文を併用する場合もある。また、他の土器のように、方向を定めず斜めの沈線で下向きの三角形を基調とする文様構成をもつものが認められる。**図20**、**図21**は巾狭い低い隆帯を貼付し、半裁竹管による爪形文を施す。この群の大半は、色調、赤褐色～暗茶褐色を呈する。胎土は砂質にとみ、金雲母、細かい長石、石英粒を含むなど共通した特徴が認められる。

### 第Ⅲ群

地文の繩文の上に半裁竹管、棒状施文具で沈線を施す土器を一括した。

#### 第Ⅲ群a類（第19図～22図）

口縁の断面はやや内湾するものが多く第19図**10**のように外反するものは少ない。また、形態は平縁が多く、小さな波状口縁は少ない。

文様構成をみると、地文の繩文は、**11**縁部付位を単節R Lを横位に、胴部は甲節R Lを縦位に施したものが多い。また、地文の上を半裁竹管または棒状施文具で、円形、弧状に沈線を施す（第19図**1**～**42**）。また、沈線と沈線の間に方形もしくは円形の印刻文をつける例もみられる。（第19図**16**）の上器は3個の円形文を連続してつなぎ、1単位としている。また、胴部文様帶は、縦位の沈線によって区画する例、結節繩文によって区画する例、小隆帯をつくって区画する例などがある。色調は赤褐色、暗赤褐色を呈し、胎土は金雲母、長石粒、石英粒を含み、砂質にとんでいる。

#### 第Ⅲ群b類（第22図**37**・**41**・**43**・**47**）

单斜繩文が施された纖維土器である。内面は小さな凹凸が残り、粗い条痕による調整が認められる。焼成は良好で赤褐色、茶褐色を呈し、一部、黒褐色を呈する。早期末～前期前葉に属すると考えられる土器で、本遺跡出土上器中、きわめて少量である。

第Ⅳ群には、埋甕**1**・**2**に使用された上器がある。つぎに述べてみたい。

#### 埋甕**1**（第19図**1**）

頂部を丸くつくった大きい4つ山の波状口縁の深鉢で胴部上位から口縁部にかけて外反する。頂部の口径は、推定で39.5cm、残存高は、29cmを測る。

器面を飾る文様は、縦位に単節R Lの繩文を全面に施したのち、半裁竹管により文様帶を区画するがこの施文法は本土器の文様構成上、主要な要素となるので、やや詳しく述べてみることとする。

波状口縁の頂部は半裁竹管により円文を施すが、円文の中心のみ地文が残り、外周は押引きの際、磨消されている。また、頂部内面は太い凹線で渦巻文を施し、口縁部内面には明瞭な段を有する。口縁部下位は沈線により山形に大区画をつくるが、この区画上位には2条の沈線で小区画をつくる。小区画の上位と下位にそれぞれ交互に4ヶ所削り取る。文様の大区画は、円形文と三角文を組合せている。なお円形文の下端は地文の繩文が磨り消されないで残っている。

胴部文様帶は、波状口縁の頂部に対応するように隆帯と沈線を組合せ、4単位に区画して構成される。隆帯は横位から屈曲してY字状懸垂文となる。この隆帯の上位の空間は、三角形と押引き沈線の組合さった文様帶が構成される。三角形の文様帶の上位には、竹管の先端で上に削り取って、残存部分に凸状の波状隆線がつくり出されている。Y字状の区画内は大きく地文の繩文を残し、沈線と波状文を組合せている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には金雲母、砂粒が含まれている。

#### 埋甕**2**（第19図**2**）

口縁部上位が内湾し、いわゆるキャリバー形を呈する器形で、口縁部は平縁である。

推定される口径は31.7cm、残存高は29cmを測る。器面を飾る文様は、胴部へ縦位の小隆帯で区画したのち、全面に単節R Lの繩文を縦位に施す。つぎに半裁竹管と横位の小隆帯で文様を区画する。口縁部

は5条の沈線による連弧文を左から右に描くが、推定される連弧文は12単位である。その上位の空間には、三角印刻文と円文を組合せている。

脣部の文様は、地文の繩文を大きく残し小隆帯の区画の中央に結節繩文を施している。なお、口縁部と胴部の境界に横位の沈線を巡らせており、これは小隆帯で区画された文様帶を意識して1単位づつ切って施文されている。また、連弧文の直下を巾0.8cm前後にナデて消しているが、おそらく、横位の沈線を施文した段階に調整されたと考えられる。つぎに、口端部と口縁部下位の小隆帯にR.Lの繩文を横位に施文されているが、これが施文の最終段階にあたると推定される。

色調は暗茶褐色を呈し、胎土には、金雲母、長石、砂粒が含まれている。

#### 第IV群

沈線文を主な文様構成とする。a～dに細別した。

##### 第IV群a類（第23図1～11）

縦位と横位の沈線により文様帶を構成する上器をa類として一括した。

口縁の断面はわずかに外反する例(1)と内湾する例(2)・(4)・(5)・(8)・(9)と直立する例(6)・(7)があるが、端部はいずれも丸くおさめている。また形態は平縁のものが多く、波状をなすもの(5)は少ない。

文様構成をみると、(5)のように、長方形の区画の中を半裁竹管の押し引きで短い単位で切り、それを連続してつなぐものがみられるが、概して、半裁竹管、ヘラ状施文具または棒状施文具で横位に沈線を施す例が多数をしめる。また施文具の太さは一様ではなく、巾12mmを測る太い例もある。

色調は赤褐色や暗茶褐色を呈し、胎土の中に金雲母、長石粒、石英粒を含み、砂質にとむ。

##### 第IV群b類（第24図1～66）

弧状、円形、三角形に沈線を組みあわせ文様帶を構成する土器をb類として一括した。

口縁部の断面は外反する例(1)～(3)・(6)と内湾する例(4)・(5)、直立する例(8)・(9)があるがいずれも端部を丸くおさめている。また形態は平縁である。

文様構成をみると、弧状に沈線を施し、その空間に沈線による円形、または三角形文を配置するものが多い。また、三角形文・円形文と綱文は併用されていない。色調は赤褐色または暗茶褐色を呈し、胎土には金雲母、長石粒、石英粒が含まれ、砂質にとんでいる。

##### 第IV群c類（第25図32～51）

横位または弧状の沈線により文様帶を構成し、さらに円形、方形、三角形文を施す上器をc類として一括した。

口縁部の断面はわずかに内湾する例(1)・(3)～(5)・(7)・(8)と直立する例(2)がある。端部はいずれも丸くおさめている。また形態は平縁であるが、跡のように刻み口をもつ例もある。

文様構成をみると、口縁下位に低い隆帯を貼付し、爪形文を施し、それより下位に沈線と三角形文・円形文を施す例(3)があるが、隆帯のみられない例が多い。また、三角形・円形文は、ヘラ状施文具で刺突状に施す例と削り取るように施される例がみられる。また、円形文の配例を交瓦につけて2条で1組を単位とする例(32～34)(36～41)がみられる。また三角形文のみられる例(47～50)は、弧状の沈線と組合さって文様帶を構成することが多い。

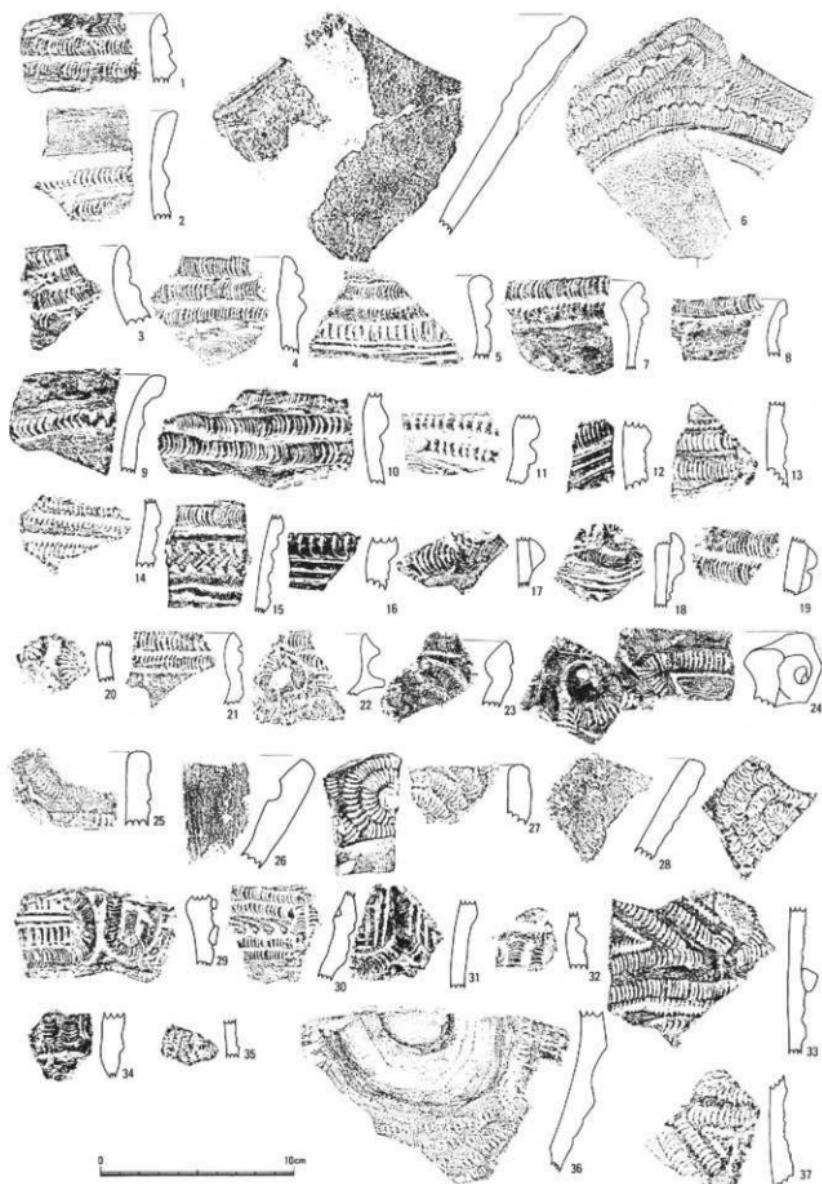
色調は赤褐色または暗赤褐色を呈し、胎土中に金雲母、長石粒、石英粒が含まれている。

##### 第IV群d類（第25図52～64）

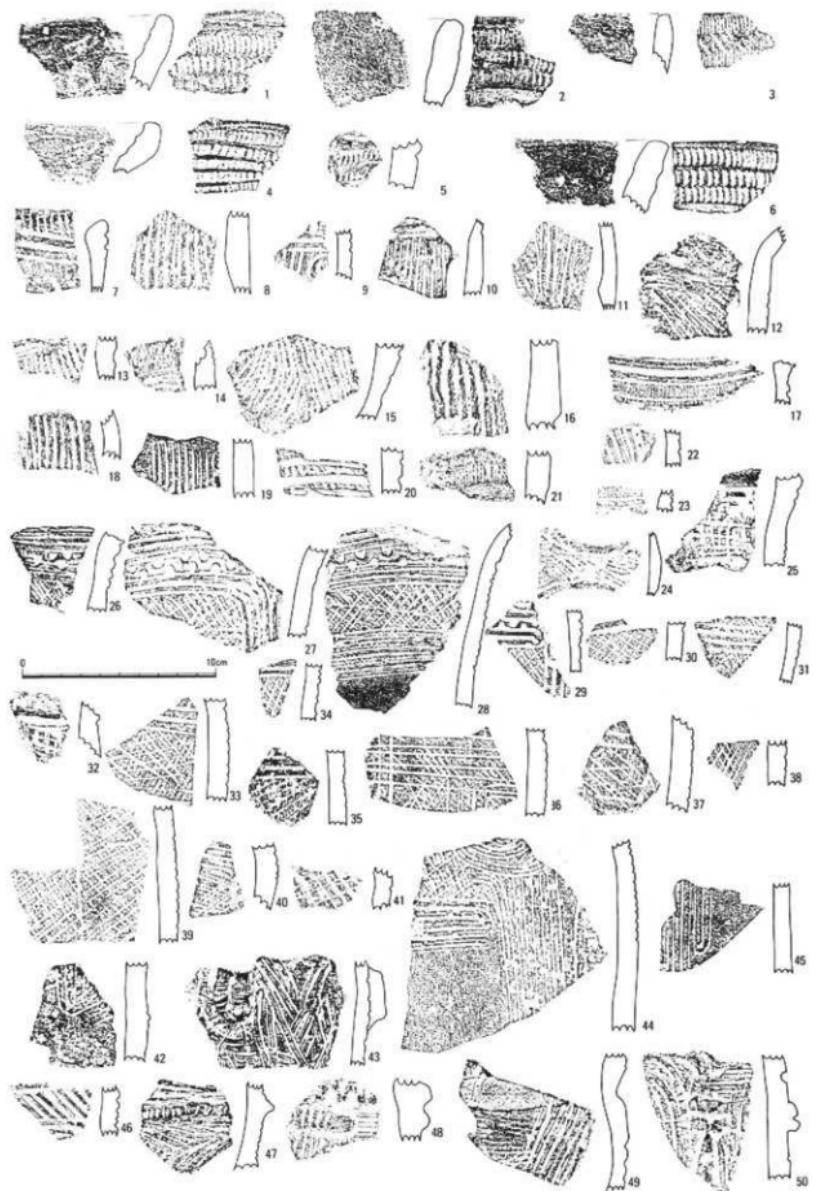
文様構成上、沈線や刻み目のみられるものの無文部分の多いものをd類として一括した。

口縁の断面はわずかに外反する例(5)と直口する例(2)。形態については平縁で端部を尖らせたものと丸くおさめたものがある。

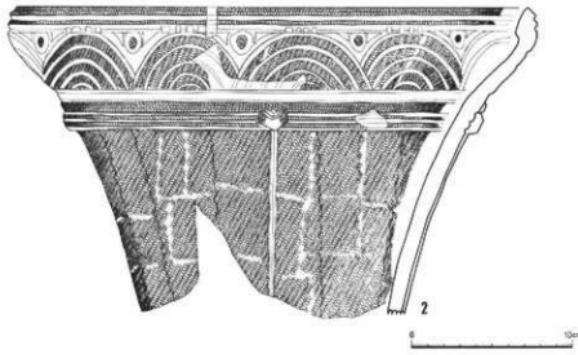
文様構成は沈線や三角形文・円形文を施しているが、無文部が多い。なお、小隆帯を縦位、横位に貼



第17図 土器拓影図（1）



第18図 土器拓影図 (2)

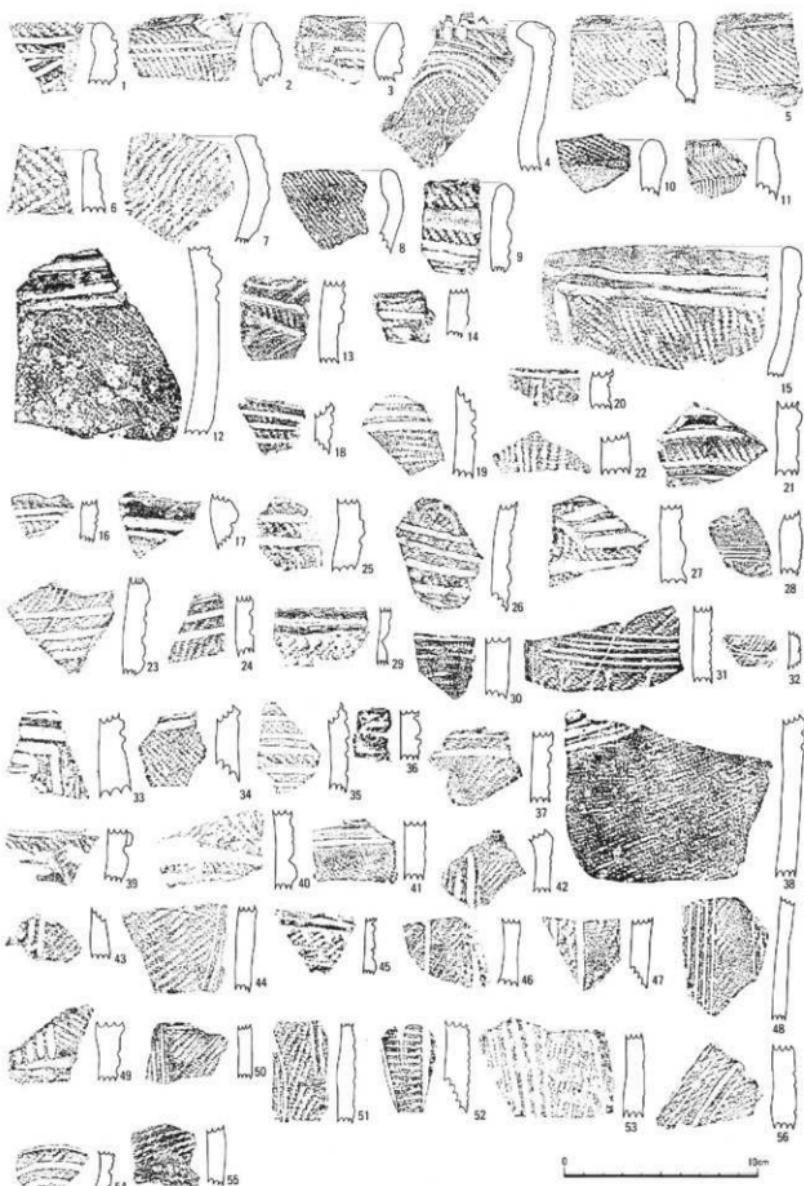


— 10cm —

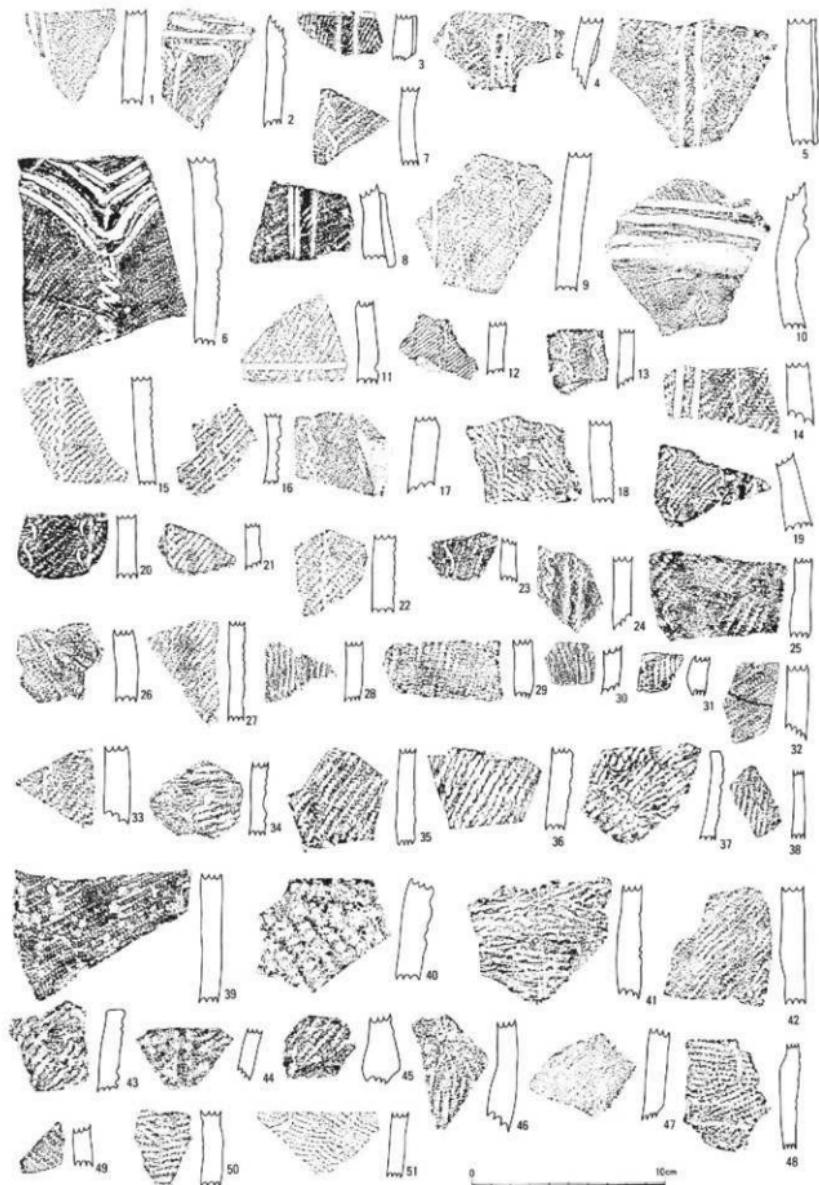
第19図 土器実測図（埋甕 1.2）



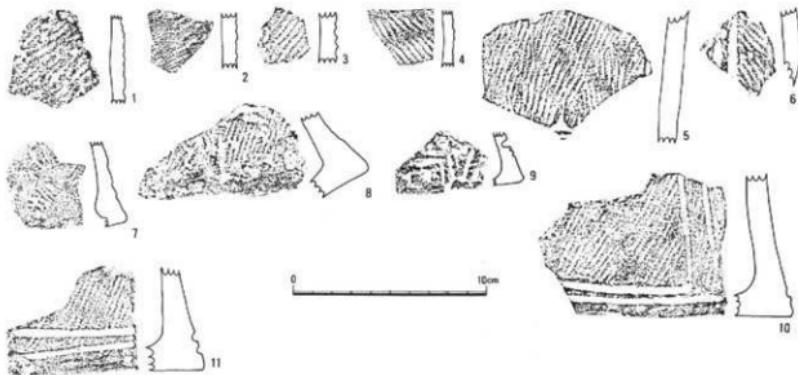
第20図 土器拓影図 (3)



第21図 土器拓影図 (4)



第22図 土器拓影図(5)



第23図 土器拓影図（6）

付したものもみられる。

色調は赤褐色または暗茶褐色を呈するものが多く、胎土に金雲母、長石粒、石英粒が含まれ、砂質にとんでいる。

#### 第V群（第26図1～4）

第I群から第IV群とは明らかに時期が異なり、中期後葉から末に帰属する土器を一括した。

口縁の残る土器は、やや内湾気味の断面で、沈線を横位に1条、それより下位に半円を6重させている(1)。また、低い隆帯をもち、ヘラ状施文具で、列点を施したり、「ハ」の字状文を施している(3)・(4)。なお、無文の部分を沈線で区画する例(2)もある。

色調は、赤褐色または淡茶褐色を呈し、堅緻である。胎土には、黒味をおびた石粒、石英粒、長石粒、金雲母を含むが、第I～第IV群土器に比べ、金雲母は少ない。出土土器中、きわめて少数である。

なお、埋甕3がこの群に帰属するため、やや詳しく触れてみたい。

#### 埋甕3（第27図5）

上胴部を欠くため、全形は不明であるが、底部から口胴部にゆるやかに内湾しながらづき、口縁部は平線と推定される。残存胴部の最大径は27cm、残存高26.5cmを測る。

胴部は、全面に巾1cm前後の縦位のケズリ調整が、内側には横位のナデ調整が認められる。胴部文様帶は、縦位の沈線を長楕円状につづけたものを2条を1単位として施文されており、胴部に6単位が巡らされていたものと推定される。

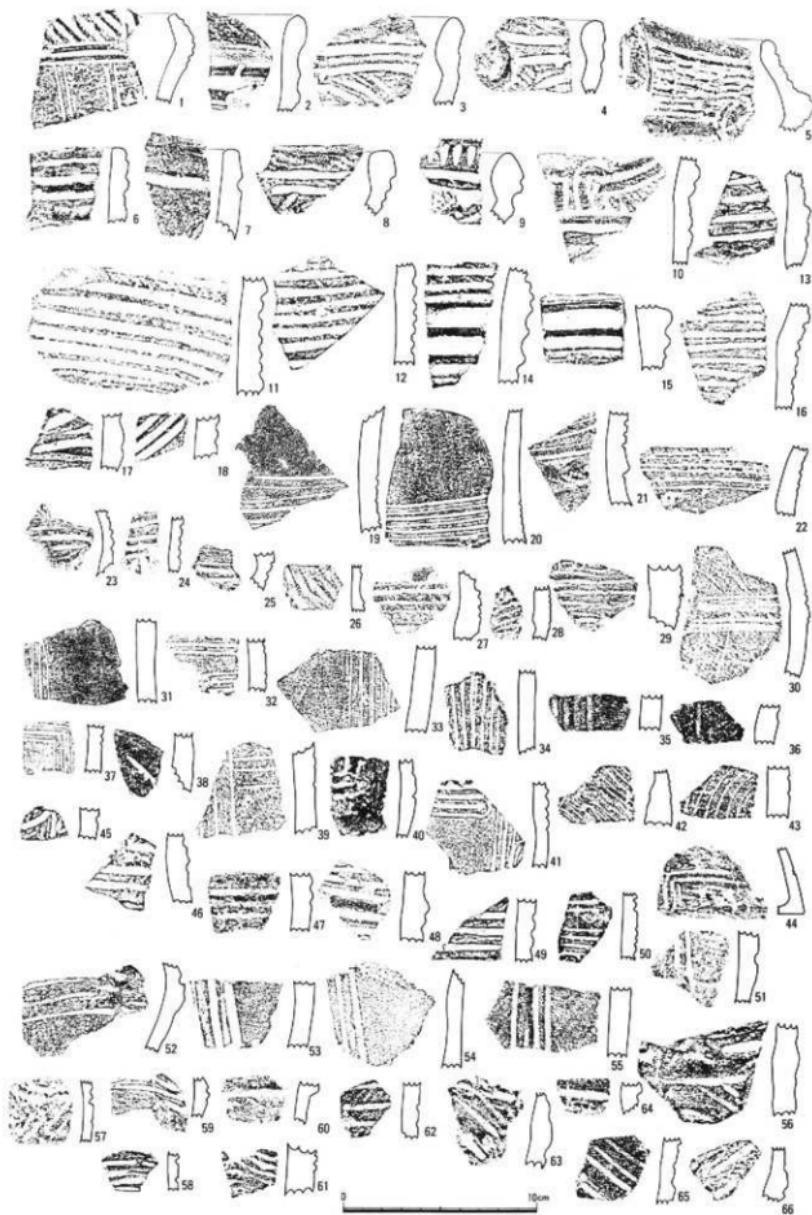
色調は明茶褐色で、上位に黒斑が認められる。胎土には、長石粒、砂粒を含む。

#### (2) 石 器

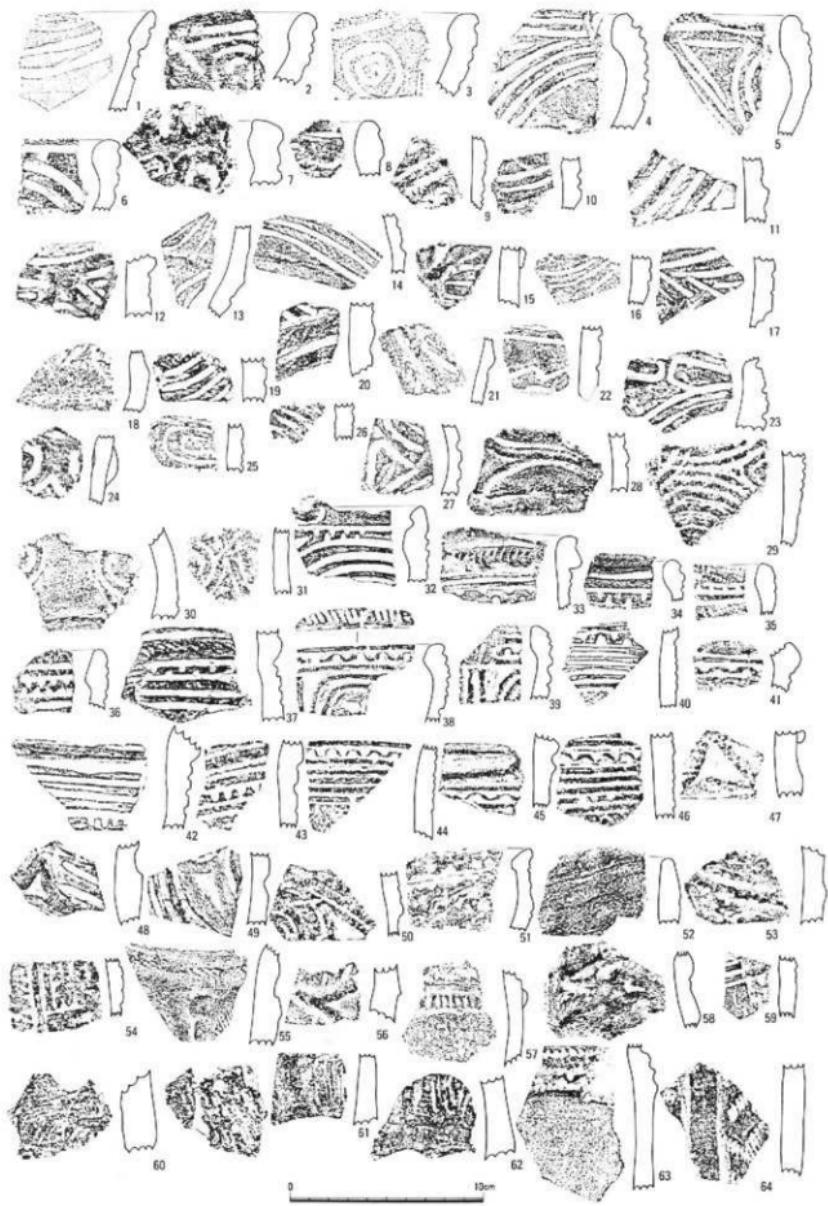
本遺跡は、若干の中期後葉～末の土器をのぞくと中期前葉の短い時期に限定され、石器の大半が中期前葉と考えられる。この時期の石器の在り方を知る上で好資料となろう。なお、本記述では、個々の出土地点、法量、石材については別表に掲げた。

#### 打製石斧（第28図～31図）

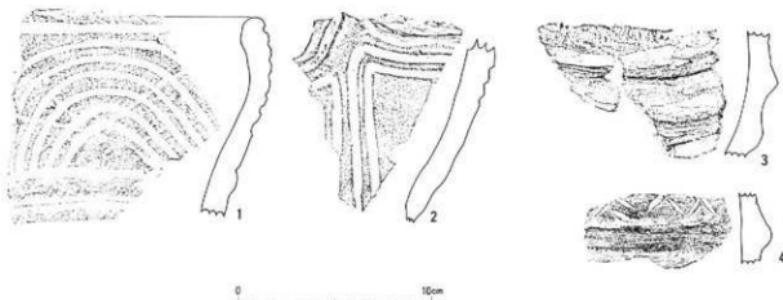
32点の打製石斧が発見された。形態や製作方法の差異によって次のように分類した。



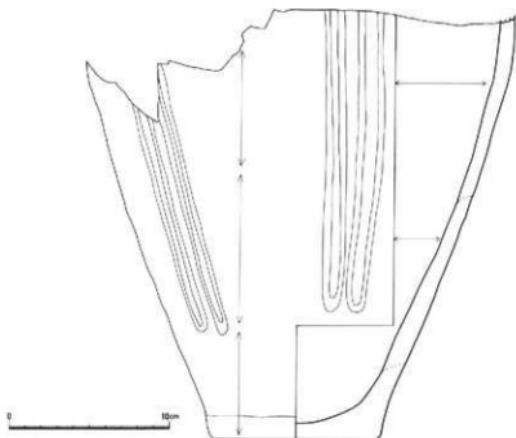
第24図 土器拓影図 (7)



第25図 土器拓影図(8)



第26図 土器拓影図 (9)



第27図 土器実測図 (埋甕 3)

第2表 出土土器一覽（1）

No.	出 土 地 点	No.	出 土 地 点	No.	出 土 地 点
	拓 影 図 1	1 - 36	D - 15 - II	2 - 34	B - 13 - I
1 - 1	B - 12 - 西	37	C - 13 - II	35	B - 12 - IV
2	B - 14 - II	拓 影 図 2		36	B - 12 - IV
3	B - 12 - IV	2 - 1	C - 12 - IV	37	B - 13 - IV
4	B - 13 - II	2	C - 13 - II	38	B - 12 - IV
5	B - 13 - II	3	B - 13 - 表 採	39	B - 13 - IV
6	C - 14 - IV	4	B - 13 - IV	40	B - 13 - IV
7	B - 12 - IV	5	B - 13 - IV	41	C - 8 - III
8	B - 12 - IV	6	C - 12 - IV	42	B - 14 - II
9	B - 14 - II	7	B 地 区 表 採	43	B - 14 - III
10	B - 14 - IV	8	C - 8 - II	44	A - 13 - III
11	B - 14	9	B - 12 - IV	45	B - 14
12	B - 13 - IV	10	B - 13 - IV	46	B 表 採
13	C - 13 - I	11	G - 2 - II	47	B - 15 - I
14	C - 13 - II	12	B - 15 - II	48	B 地 区 表 採
15	B - 13 - IV	13	B - 13 - IV II	49	A - 12 - III
16	A - B - IV	14	B - 13 - IV	50	B - 14 - II
17	A - B - I	15	G - 3 - I		拓 影 図 3
18	A - B - III	16	C - 8 表 採	3 - 1	B - 13 - II
19	B - 13 - II	17	D - 8 -	2	B - 14 - II
20	C - 13 - IV	18	C - 13 - IV	3	B - 14
21	B - 14	19	B - 14 - II	4	B - 14 - IV
22	B - 14	20	B - 13 - I	5	B - 13 栗 色
23	B - 12 - IV	21	B - 14 - II	6	B - 12 - IV
24	B - 3 表 採	22	B - 13 - IV	7	B - 14
25	B - 14 - II	23	B - 13 - IV	8	D - 14
26	C - 12 - IV	24	C - 8 表 採	9	B - 13 - IV
27	B - 14 - II	25	A - 12 - III	10	B - 14 - III
28	B - 13 - IV	26	C - 12 - IV	11	B - 13 - IV
29	B - 13 - IV	27	C - 12 - IV	12	B - 14
30	C - 13 - IV	28	C - 12 - IV	13	B 表 採
31	B - 12 - IV	29	B - 12 - IV	14	B - 13 栗 色
32	D - 14 - IV	30	D - 14 - II 表 採	15	B - 13 - IV
33	C - 13 - I	31	B - 13 - II	16	B - 13 - II
34	D - 14 - IV	32	B - 13 表 採	17	B - 13
35	表 採	33	A - 12 - III	18	B - 13 - IV

第3表 出土土器一覧(2)

No.	出土地点	No.	出土地点	No.	出土地点
3 - 19	C - 12 - IV	4 - 12	B - 13 - IV	4 - 48	B - 12 - III
20	B - 12 - IV	13	C - 13 - II	49	B - 13 - IV
21	B - 13 - IV	14	B - 13 - IV	50	B - 12 - IV
22	B - 14 - III	15	D - 15 - I	51	B - 12 - IV
23	B - 13 - IV	16	D - 13 - IV	52	B - 13 - IV
24	B - 13 - II	17	A - 12 - III	53	B - 13 - IV
25	B - 14 - II	18	D - 15 - II	54	D - 13 - II
26	A - 13 - IV	19	C - 13 - III	55	D - 15 - II
27	C - 12 - IV	20	C - 8 - I	56	B - 13 - II
28	B - 13 - II	21	B - 13 - IV	拓影図 5	
29	B - 13 - IV	22	C - 14 - III	5 - 1	B - 13 - IV
30	B - 13 - IV	23	B - 13 - IV	2	B - 13 - II
31	B - 13 - II	24	B - 13 - II	3	B - 12 - IV
32	B - 14 - III	25	A - 13	4	B - 14 - I
33	B - 13 - II	26	B - 13 - II	5	B - 13 - II
34	B - 14 - II	27	B - 13 - II	6	B - 13 - IV
35	B - 13 - II	28	B - 13 - IV	7	B - 13 栗色下
36	B - 13 - II	29	D - 14 - IV	8	B - 13 - II
37	B - 13 - II	30	A - 13 - I	9	B - 13 栗色
38	C - 12 - IV	31	B - 13 - IV	10	C - 14 - IV
39	A - 13 - III	32	B - 13 - II	11	C - 12 - IV
40	B 地区 II	33	B - 13 - 栗色	12	C - 12 - IV
41	B - 14 - III	34	B - 14 - II	13	B - 13 - IV
42	B - 14	35	B - 14 - III	14	B - 13 栗色
拓影図 4					
4 - 1	A - 13 - III	37	B - 14 - II	16	D - 13 - IV
2	C - 13 - II	38	B - 13 - IV	17	D - 14 - II 栗色
3	D - 13 - IV	39	A - B - I	18	B - 12 - IV
4	B - 13 - IV	40	B - 14 - II	19	A - 13 - I
5	C - 13 - IV	41	B - 14 - II	20	D - 14 - IV
6	I - 4 No	42	C - 13 - II	21	B - 14 - II
7	B - 表 採	43	B - 13 - II	22	B - 12 - IV
8	D - 14 - IV	44	B - 13 - II	23	C - 12 - IV
9	B - 13 - IV	45	B - 12 - IV	24	D - 12 表 採
10	A - 12 - III	46	D - 13 - IV	25	B - 13 - IV
11	B - 14 - IV	47	B - 13 - 栗色下	26	B - 13 - IV

第4表 出土土器一覽(3)

No.	出 土 地 点	No.	出 土 地 点	No.	出 土 地 点
5 - 27	B - 15 - I	6 - 11	C - 10 - IV	7 - 35	C - 12 - III
28	B - 14	拓 影 図 7		36	B - 12 - IV
29	B - 14 - I	7 - 1	C - 8 - II	37	B - 13 - I
30	C - 12 - IV	2	C - 12 - IV	38	A - 13 - I
31	B - 13 - IV	3	C - 12 - IV	39	A - 13 - III
32	B - 14 - IV	4	C - 12 - IV	40	B - 12 - IV
33	B - 13 栗 色	5	C - 8 - III	41	B - 12 - IV
34	D - 13 - IV	6	A - 13 - I	42	B - 13 - II
35	A - 13 - I	7	調査区南	43	A - 3 - I
36	C - 15 - I	8	C - 12 - IV	44	C - 13 - II
37	D - 13 - IV	9	B - 14	45	B - 12 - IV
38	C - 12 - III	10	C - 13 - II	46	B - 13 - II
39	B - 13 - IV	11	B - 13 - IV	47	C - 14 - I
40	C - 14 - IV	12	B - 13 - IV	48	C - 14 - III
41	D - 13 - II	13	A - 12 - III	49	B 地区 II 層
42	A - 12 - III	14	B - 12 - IV	50	B - 13 - I 表 採
43	D - 13 - II	15	B - 13 - II	51	C - 8 - III
44	B - 13 表 採	16	C - 15 - II	52	C - 12 - IV
45	B 地区表採	17	B - 13 - IV	53	D - 14 - IV
46	A - 13 - I	18	A - 13 - III	54	E - 4 表 採
47	B - 13 - II	19	F - 4	55	C - 12 - III
48	A - 13 - I	20	B - 13 - IV	56	B - 13 - II
49	C - 12 - IV	21	C - 12 - IV	57	C - 13 - IV
50	B - 13 表 採	22	C - 12 - IV	58	D - 12 表 採
51	B - 14 - III	23	D - 4 表 採	59	B - 12 - IV
拓 影 図 - 6		24	B - 13 - IV	60	B - 12 - IV
6 - 1	D - 13 - IV	25	C - 8 - III	61	E - 7
2	D - 14 - IV	26	B - 12 - IV	62	C - 15 - I
3	B - 13 I	27	C - 13 - IV	63	B - 12 - IV
4	C - 13 - IV	28	B - 12 - IV	64	B 表 採
5	B - 13 - II	29	B - 12 - IV	65	B - 12 - IV
6	B - 13 - I	30	E - 7	66	B - 13 - II
7	C - 8 - III	31	B - 13 - I	拓 影 図 8	
8	C - 14 - IV	32	C - 12 - IV	8 - 1	D - 15 - I
9	C - 13 - II	33	B - 12 - IV	2	B - 13 - I
10	A - 13 - I	34	B - 13 表 採	3	B - 13 - II

第5表 出土土器一覧(4)

No	出上地点	No	出土地点	No	出土地点
8-4	B-13-I	8-26	E-7	8-48	C-15-II
5	B-13-II	27	C-13-IV	49	B-13-IV
6	B-13-II	28	B-14-IV	50	A-13-III
7	B-14-II	29	B-14-II	51	D-8
8	D-14-IV	30	C-8 北排上	52	上野 E
9	A-12-III	31	B地区表採	53	B-13
10	F-4 表土	32	C-8-II	54	B-14-II
11	B地区表採	33	C-12-IV	55	C-12
12	B-13 表採	34	C-12-IV	56	B-13-II
13	D-12 表採	35	C-12-IV	57	C-13-IV
14	C-12-III	36	C-8-III	58	B-6-II
15	C-12-IV	37	A-13-I 栗色	59	B-12-IV
16	D-14-II	38	調査区南表採	60	B区南側
17	C-12-III	39	C-12-IV	61	上野 E
18	H-4 表上	40	B-14	62	D-14-IV
19	B-12-IV	41	C-13-II	63	B-14-I
20	B-13-II	42	B-13-IV	64	B-13-II
21	B-13-II	43	B-13-IV	拓影図 9	
22	F-4	44	B-13-IV	9-1	B-13-II
23	A-13-I 栗色	45	A-12-III	2	D-15-I
24	B-13-II	46	B-12-IV	3	D-15-I
25	表採	47	B-13-II	4	D-15-II

### a類（第27図1～8 第28図1～）

自然面、及び第1次剥離面を大きく残す粗製の石斧を一群とした。形態は、従来の分銅形、棱形、短冊形の分類には帰属できないものもあり、第一剥離によってその形態が不定形を呈したと判断される。とはいっても、石斧の機能からすれば、長方形に近い形を基本形としたことは剥離方法から推定できる。刃部は偏刃もしくは円刃である。石材は、砂岩か硬質砂岩である。法量は、長さ135～109mm、巾69～55mm、厚さ36.5～21mm、重さは227～70.9gを測る。

### b類（第27図～第28図）

石材の両面を調整し、撥形もしくは短冊形を呈するものをこの類とする。前者が7点、後者が2点、破損して分類不能が2点である。

刃部は、直刃、円刃、偏刃が認められる。石材は、頁岩（珪質・凝灰質）4点、安山岩3点、綠泥片岩1点、凝灰質岩1点、硬質砂岩2点である。法量は、長さ12.65～30mm、巾90～48mm、厚さ32～11mmを測り、重さは146.2～60.5gである。

### c類（第28図 25）

大きく側面を剥離し、いわゆる分銅形を呈するものをこの類とする。調整は、大きく剥離する。刃部は円刃を呈する。石材はチャートを使用する。法量は、長さ118mm、巾72mm、厚さ15mm、重さ135.8gを測る。

### d類（第28図、第31図 1～4）

小型で、石材の両面を調整するものをd類とした。特に、28・29は長さ80mm以下で、他の例と異なる。このほかの石斧28・29、(30～32)は、上半部が欠損しており、外部から大きな力が加えられたことが想定される。刃部は円刃、偏刃がみられる。石材は、安山岩3点、珪質頁岩3点、硬質砂岩1点である。法量は、ほぼ全形を知り得る28・29で、長さ77～74mm、巾46～43mm、厚さ19～13mm、重さ58.8～49.6gを測る。破損した例では、巾72～47mm、厚さ26～14mmを測る。

### 磨製石斧（第31図 5～7）

3点出土した。全形を知ることのできる2点の資料をみると、刃部から基部まで入念に研磨され乳棒状を呈する。いずれも側面は敲打され、着装用のくびれ部をつくっている。また、基部に大きな欠損があり、外力の大きさを物語っている。両者とも刃部が破損している。フォルンヘルスと緑色岩を使用している。

### 磨 石（第32図～第34図 1～3）

18点が出土した。すべて安山岩が用いられており、そのうちほとんどが多孔質安山岩である。形態は楕円形で厚みのあるもの、楕円形で偏平のものから、円形で厚みのあるもの、隅丸長方形で厚みのあるものなどのバラエティがある。また、表裏に凹み部をもつもの、敲打痕のみられるものなど、凹石、敲石との併用が考えられるものもある。大きさについても、最大長148mm、最小長101mmとそれ程差異は認められない。また使用痕をみると片面のみのものから3面使用のものまである。

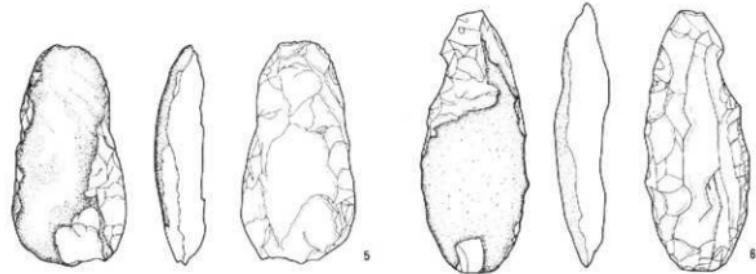
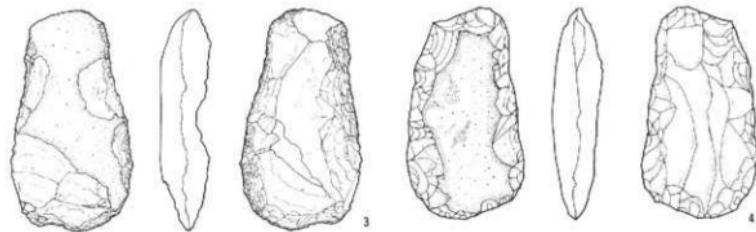
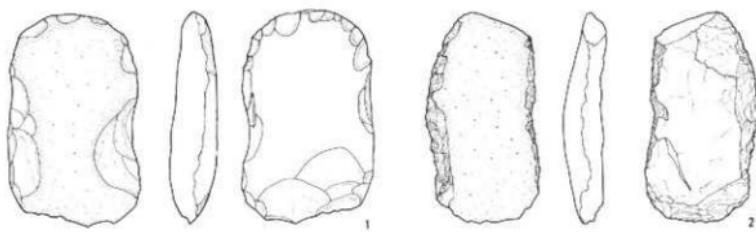
### 磨石に伴う石皿は、2点が発見されているが、破片である。

### 石 銚（第34図 4～9）

6点が出土した。いずれも横型を呈し、珪質砂岩製で粗製のもの5点と凝灰質頁岩製でやや精製のものの1点がある。前者は、つまみ部と刃部をつくり出す調製がみられるほか、全面にわたる調整痕はみられない。また、刃部の断面形は、薄くつくり出すものとやや太くつくり出すものの両者がある。後者の頁岩製のものは、やや細かく調整されているが、刃部は太くつくり出している。

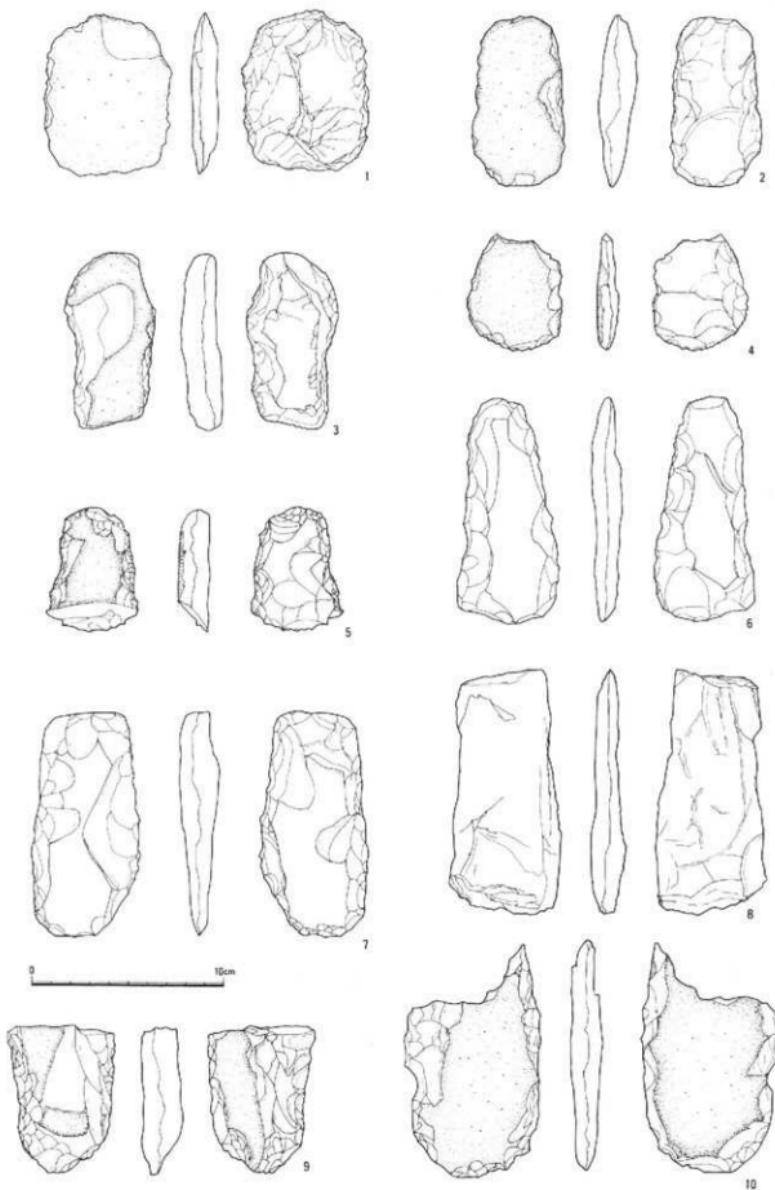
### 打製石錐（第34図 10）

1点が採集されている。ほぼ半分が残っているにすぎないが、表裏両面の両面を打ちかいている。残



0 10cm

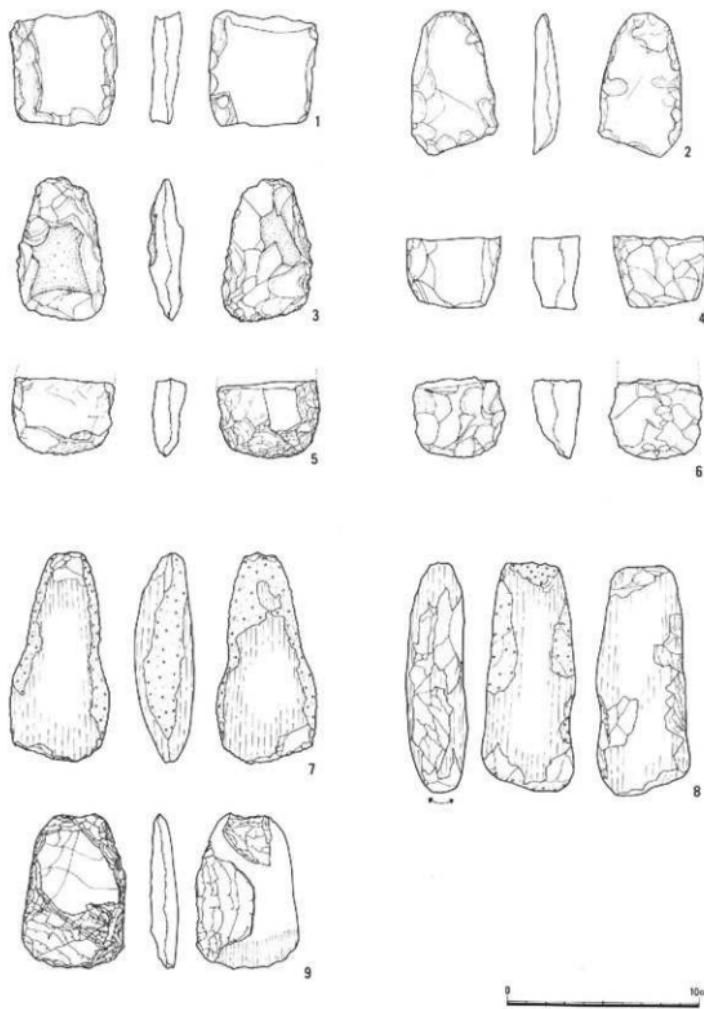
第28図 石器実測図 (3)



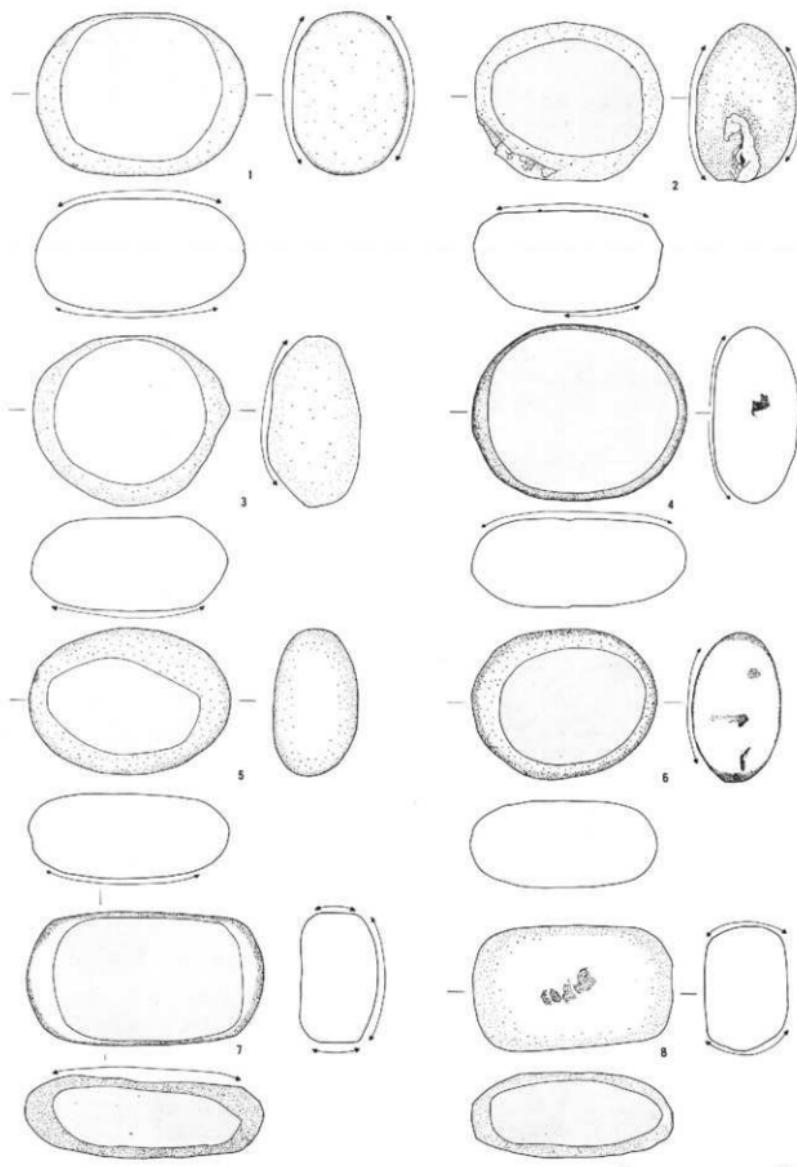
第29図 石器実測図 (4)



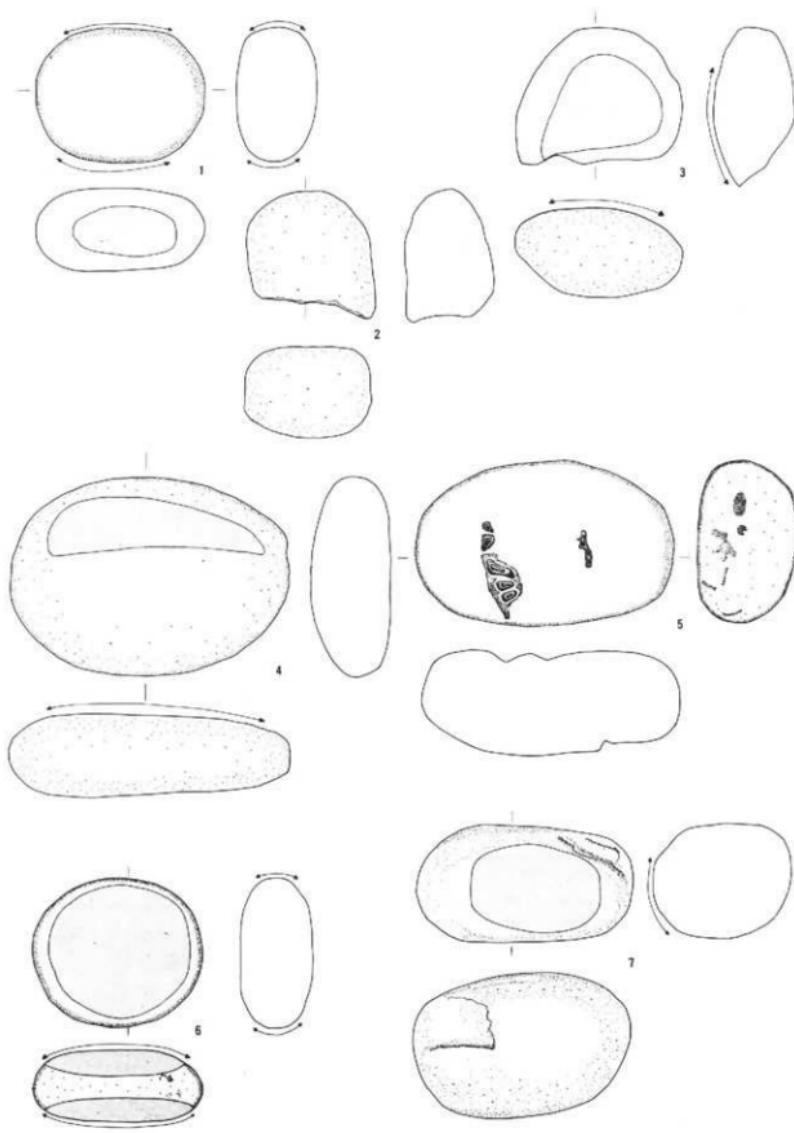
第30図 石器実測図 (5)



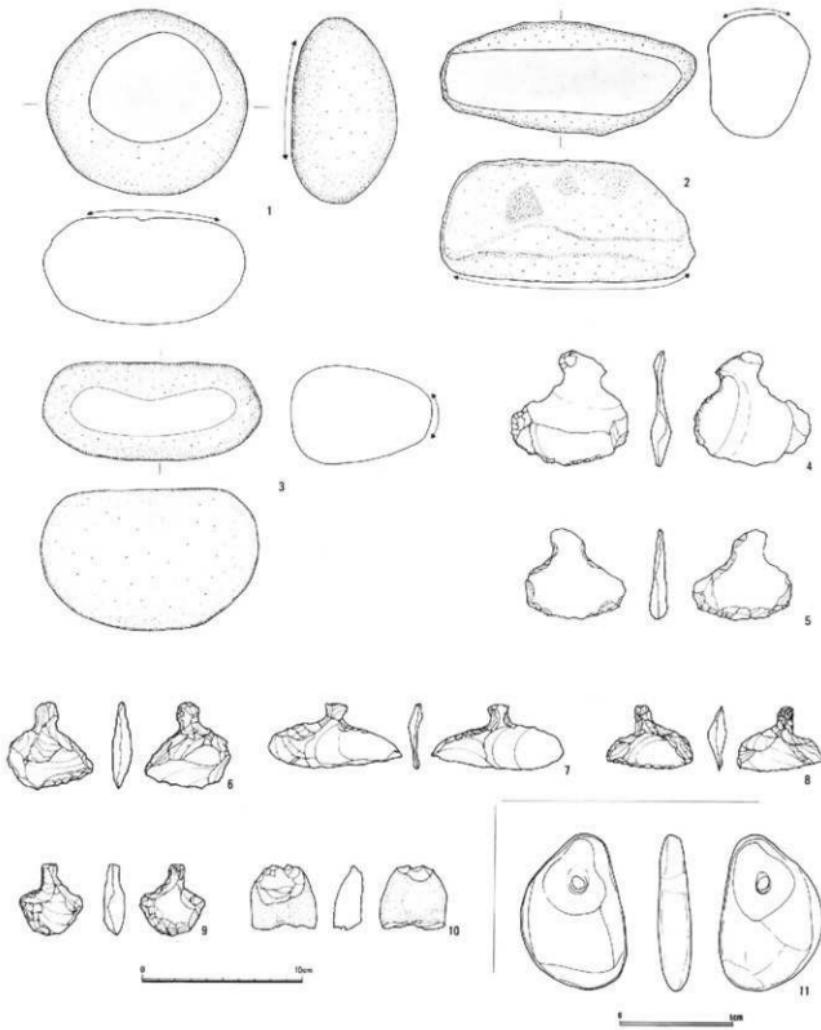
第31図 石器実測図 (6)



第32図 石器実測図 (7)



第33図 石器実測図 (8)



第34図 石器実測図 (9)

存値で、長さ50mm、巾33mm、厚さ17mm、重さ35.2gを測るので、完形であっても100gを越えないと推定される。砂岩製である。

#### 大珠（第34図 11）

いわゆる垂玉で、長さ68mm、巾45mm、厚さ14mm、重さ66gを測る。形態は、長楕円形と勾玉形の中間的形態を呈する。珪質岩の全面を美しく研磨し、孔は片側から穿孔されている。なお、孔の径は11mm×9mm（表）、9mm×5mm（裏）を測る。

第6表 石器計測値一覧(2)

No.	整理	名 称	出土地点	長さ×巾×厚さ (mm)	重さ (g)	材 質
打製石斧						
1	139	打製石斧	C-13-II	110 × 69 × 36.5	227	硬質砂岩
2	391	"	B-13-I	109 × 55 × 21	169.7	砂 岩
3	393	"	C-13-IV	114 × 63 × 26	201.5	"
4	304	"	B-13-IV	106 × 56 × 24	196	硬質砂岩
5	21	"	G-3	114.5 × 59 × 27	182.1	砂 岩
6	162	"	B-13-I	135 × 55.5 × 29	200.6	"
7	395	"	C-13-IV	78 × 46 × 19	70.9	硬質砂岩
8	167	"	B-13-I	83 × 59 × 17	95.6	フォルンヘルス
9	24	"	D-14-II	83.5 × 66 × 15	101.9	砂 岩
10	25	"	B-13-I	87.5 × 47 × 19	87.4	珪質頁岩
11	202	"	C-12-IV	88 × 47 × 18	96.7	頁 岩
12	32	"	B-13-II	60 × 49 × 17	38.4	"
13	197	"	B-12-IV	64 × 42 × 15	60.5	硬質砂岩
14	192	"	B-13-I	115 × 48 × 11	102	綠泥片岩
15	280	"	B-13-II	116 × 55 × 21	140	安山岩
16	18	"	C-13	126.5 × 57 × 16	155.5	珪質頁岩
17	34	"	D-14-II	76 × 55 × 21	101.1	凝灰質頁岩
18	88	"	表 採	118 × 72 × 15	135.8	チャート
19	29	"	G-3	119 × 48 × 22	174	凝灰質岩
20	191	"	B-13-IV	120 × 49 × 20	148.4	珪質頁岩
21	190	"	B-13	80 × 48 × 11	61.5	硬質砂岩
22	112	"	C-13-IV	99 × 56 × 25	132.1	"
23	95	"	C-15	79 × 56 × 24	146.2	安山岩
24	76	"	C-13-II	110.5 × 56 × 32	200.9	頁 岩
25	47	"	表 採	111 × 90 × 24	173.2	安山岩
26	294	"	B-12-IV	75 × 52 × 26	115.6	安山岩
27	182	"	B-13-I	59 × 53.5 × 14	60.3	"
28	181	"	C-14-I	77 × 43 × 13	49.6	珪質頁岩
29	177	"	C-15-IV	74 × 46 × 19	58.8	"
30	161	"	C-13-II	38 × 49 × 26	59.3	硬質砂岩
31	394	"	B-13-II	40 × 53 × 16	41.9	安山岩

第7表 石器計測値一覧(3)

No	整理	名 称	出土地点	長さ × 幅 × 厚さ (mm)	重さ (g)	材 質
32	51	打製石斧	C-13-IV	415 × 47 × 25	52.8	珪質頁岩
<b>磨 製 石 斧</b>						
1	392	磨製石斧	E-13-II	108 × 51 × 30	236.4	フォルンヘルス
2	122	"	表 採	111 × 45 × 31	281.8	綠色岩
3	338	"	B-14-IV	76 × 50 × 13	83.6	"
<b>磨 石</b>						
1	285	磨 石	B-13-I	101 × 130 × 71		安 山 岩
2	3	"	A-13-III	118 × 97.5 × 63		"
3	23	"	A-3	122.5 × 105 × 58		"
4	264	"	B-5	133 × 108 × 54		"
5	314	"	B-14	126 × 92 × 52		"
6	267	"	B-13-I	116 × 92 × 55		"
7	320	"	B-4	148 × 80 × 47		"
8	1	"	C-13-IV	125 × 77.5 × 52		"
9	263	"	B-13-I	106 × 83 × 50		"
10	8	"	C-6-IV	70 × 79 × 56		"
11	6	"	C-13-IV	87 × 105 × 55		"
12	288	"	D-9-II	175 × 122 × 50		"
13	323	"	D-12	161 × 100 × 63		"
14	4	"	C-12-IV	106.5 × 92.5 × 45		"
15	5	"	B-14-III	136 × 86.5 × 71.5		"
16	332	"	D-9	125 × 115 × 64		"
17	52	"	B-13-III	160 × 64 × 76.5		"
18	2	"	C-15	137 × 87.5 × 61		"
<b>そ の 他</b>						
1	175	石 匙	B-12-IV	35 × 84 × 9	17.4	珪質砂岩
2	138	"	D-14-IV	55 × 61 × 12	37.9	"
3	168	"	C-15-I	54 × 54.5 × 12	26.9	"
4	137	"	C-15-I	35 × 84 × 9	17.4	"
5	169	"	C-15-I	40 × 54 × 11	17.8	"
6	515	"	S-13-IV	44 × 39 × 18	17.2	凝灰質頁岩
7	340	石 鏈	表 採	(50) × 33 × 17	35.2	砂 岩
8	411	大 珠	C-13-IV	68 × 45 × 14	66.0	珪 質 岩

## 第V章 まとめ

### (1) 先土器時代について

発見された石器は、木葉形を呈する尖頭器、三角形を呈する尖頭器、有舌尖頭器、切断技法のみられるナイフ形石器であった。

石器の出土層位は、木葉形尖頭器が休場層直上、有舌尖頭器が栗色土層下位を主体とするものと觀察されたことはすでに述べた。本遺跡において宮上黒土層が明瞭でないからすれば本遺跡の栗色土層下部にはあるいは先土器終末から縄文期初頭にあたる遺物が包含されてよいものとできるし、事実そうした知見は本地域でかなり普遍的にみられるところである。よって、本遺跡における尖頭器・有舌尖頭器の出土層位は基本的には良好なものと認めるとともに、本遺跡の尖頭器・有舌尖頭器の出土層位をもって為鷹山麓における確実な確認例としておこうと思う。

細石器文化の標準遺跡である休場遺跡では、出土した石器が休場ローム層上部から発見されており<sup>註1</sup>、一方、縄文早期の富士石遺跡では、遺物の発見は富士黒土層を中心とするものであった。<sup>註2</sup> 従来、本遺跡のような尖頭器文化に関する知見はとぼしく、どの層位から出土するのかの所見は得られていなかった。こうした点では細石器文化と縄文早期の間を埋める例を提出したことになるかもしれない。

つぎに、石器の年代観について1・2述べてみたい。第1に木葉形尖頭器の年代観についてである。この形態の尖頭器は、一般的にいわれるよう、ナイフ形石器以後とするとができるので、本遺跡でみられる切断技法のナイフ形石器より後出するものと考えざるをえない。<sup>註3</sup>

第2に有舌尖頭器と木葉形尖頭器とが併行するかどうかという点である。本遺跡の有舌尖頭器は、細長い身部で水平あるいは突出する基部に舌部が接合するなどの特徴から、小瀬ヶ沢遺跡出土の有舌尖頭器に類似しているが<sup>註4</sup>、この遺跡の場合木葉形尖頭器を伴なっている。それ以後に位置づけられる酒呑ジリソナ遺跡、荻原遺跡の石器構成にも木葉形尖頭器、有舌尖頭器が伴なっている。<sup>註5</sup> 以上のような事例にもとづき、本遺跡の出土例をみると、層位の上では、木葉形尖頭器が有舌尖頭器に先行するといえるが、遺物の山上範囲が明らかに游離したものをぞいて、50cm前後の間において連続して追えるので、両者が同一時期の所産である可能性は強いものと考えておきたい。このような組合せをもつ本遺跡の尖頭器、有舌尖頭器群を出土層位・形態の特徴から、先土器時代終末と考えておきたい。

つぎに、遺跡の性格をめぐる問題について考えてみたい。

本遺跡における先土器時代の遺物とその出土状態は、礫群や炉跡、またユニット、ブロックとか呼称される遺物集中箇所も認められなかった。また、出土した石器の構成をみると、尖頭器、有舌尖頭器などが多く、そのほかの石器類はきわめて少ないという状況を示している。

このことは、小支谷をはさんで存在する上野遺跡の先土器時代面との間に明瞭な差異をもっているようである。上野遺跡の場合、ナイフ形石器を中心とする時期であるが、石臼い炉を中心にして遺物集中箇所が発見され、集落遺跡と呼んでよい構造をもっていた。<sup>註6</sup> また、この地域における細石器文化の標準遺跡である休場遺跡の場合、2ヶ所の石臼い炉を中心にして遺物集中箇所が認められている。<sup>註7</sup> 本遺跡は、これら2遺跡より後出する遺跡であり、そのまま比較検討はできないが、注目すべき点であろう。

ところで、尖頭器・有舌尖頭器等は、愛鷹山麓周辺においても、発掘調査で出土することよりも、むしろ、単独で採集されることが多い。近年、発掘調査された豊田町広野北遺跡は尖頭器を主体とする時期の把握された県内唯一の比較対象例となり得る遺跡である。この遺跡では細石器段階に先行する尖頭段階が確認された。尖頭器は約100×50mの範囲に30点ほどが分布し、1ヶ所でブロックが認められた

ほか、単独出土例が点在する状況であった。なお、ブロックの構成は配石と石器群のみであったといわれている（註8）。

本遺跡の場合、木葉形尖頭器と有舌尖頭器の時期であった。両者の関係は約150mほど離れて出土したほか、有舌尖頭器は出土総数7点のうち6点がB地X50×30mの範囲に30~12mの距離をおいて発見された。また、ブロック等は発見されず、それぞれが単独出土であった。

本遺跡と広野北遺跡の出土例を比較すると、時期の違いこそあるものの、遺跡の中で限定された範囲に石器が点々と分布し、いくつかの単独例が何ヶ所かみられる状況は、きわめて類似していると判断される。また、広野北遺跡で確認されたブロックは、本遺跡では認められず、もっと散在的な在り方と評価できるのではないかと考えられる。

このような本遺跡と広野北遺跡の比較でみられた類似点と違いが、何ゆえあらわれるのか、またこのような石器の散在的・在り方は何を意味するのか、本遺跡の性格にかかる問題であることを指摘し、検討課題としておきたい。

## (2) 縄文時代について

縄文七器は第I～V群に分類した。そのうち、第III群b類・第V群土器は早期末～前期前葉・晩利期の新しい時期であって、本遺跡では極少量出土したにすぎない。この部分をのぞくと、ほとんどが中期前葉の五領ケ台期に併行する上器である。

このうち、第I群上器は、爪形文を主要な文様構成とする土器で、東海地方西部、関西地方系の土器である。第I群bとした上器は鹿島式土器に比定されるほか、北裏C式と呼称される上器が多いと判断される。<sup>註9</sup> 第II群としたグループは五領ケ台I式に、第III群a類土器が五領ケ台II式に併行すると判断される。第IV群については、比較検討材料をもちあわせていないが、文様構成上、三角形文・円形文のグループは五領ケ台I式に併行するであろう。<sup>註10</sup> 以上のように考えるとすれば、ほとんどが五領ケ台I・II式併行期に含まれる。

一方、出土した石器類の内容は、打製石斧32点（約45%）、磨製石斧3点（約4.2%）、磨石18点（約25.7%）、石匙6点（約8.5%）、石錐1点（約1.4%）、大珠（約1.4%）である。このことは、同じ時期の柏原遺跡の場合と異なる。柏原遺跡における昭和54年度の調査結果によると、最も多い石器に石鏃があげられ312点（約26%）を数える。ついで、磨石296点（約25%）、打製石斧217点（約20%）がしめている。<sup>註11</sup>

石斧や磨石の存在からすれば、両遺跡が植物質食料に大きく依存した生業形態を反映しているとみるとができる。この場合、柏原遺跡に多くみられた石鏃の存在は、本遺跡では欠落していることとなり遺跡の性格にまでおよぶ問題と考えられる。

つぎに遺構について考えてみたい。本遺跡からは、埋甕3ヶ所、上坑、焼土が認められた。一般に埋甕は埋葬遺構と関連するとされ、さらに胎児～乳児段階を対象とするとする見解もあるとともに、愛知県吉胡貝塚発見のように成人骨を再葬（洗竹葬）によって納めた例もある。また時期については、中期中葉（勝坂期）以降、後期まで盛行し、その分布は概して東日本に偏在しているという。<sup>註12</sup> 埋甕の在り方は、基本的に住居跡内の屋内埋甕と屋外埋甕とに分かれるとされており、本遺跡の場合屋外埋甕の範に入るが、その在り方は数基が群集して存在する例ではなく、むしろ単独例が3ヶ所、発見されたという状況であった。

では埋甕周辺で発見された上坑との関連はどうであろうか。土坑は上位に配石なども伴なっておらず墓壙であるかどうかという判断はできなかった。むしろ、復土中に焼土の含まれるもの、自然堆積を示すものが多く、その多くは墓壙ではなく性格不明といわざるを得ない。

従来、単独埋甕の調査例は少ない。本遺跡のうち、2例が五領ヶ台併行期であること、周辺に性格不明の土坑が存在すること、なども本調査の成果と考えられる。

以上、2・3の課題を述べ、本書のまとめとしたい。

#### 註

- 註1 杉原住介・小野貞一「静岡県休場遺跡における細石器文化」『考古学集刊』第三卷第2号 1965年
- 註2 平川昭夫他『八分平B・富士石遺跡』 1981年
- 註3 加藤晋平・鶴丸俊明『石器の基礎知識先土器（上）』 1980年
- 註4 芦沢長介「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」『東北大学日本文化研究所研究報告』2 1966年
- 註5 増田一裕「有舌尖頭器の再検討」『旧石器考古学』22 1981年
- 註6 小野真一他「下長座上野遺跡」 1979年
- 註7 註1前掲書
- 註8 山下秀樹「広野北遺跡発掘調査概報」 1983年  
および、発掘調査にあたられた栗野克己氏の御教示による。
- 註9 紅村弘・増子康真他「東海先史文化の諸段階 資料編I」 1977年
- 註10 山口明「縄文中期初領土器群の分類と編年」『駿台史学』第43号 1978年
- 註11 中野国雄・平川昭夫「柏庄遺跡発掘調査概報」 1979年
- 註12 佐々木藤雄「埋甕蓋ノート」「異貌」第3号 1975年

## 特論

### 茶木畠遺跡の露頭に見られる愛鷹ローム層 の鉱物組成

高 橋 豊

#### (1) はじめに

茶木畠遺跡発掘調査地点及びその周辺には、第35図の表層地質断面図に示したような、愛鷹ローム層の現世腐植質火山灰層及び上部ローム層の一部が露出していることが多い。

茶木畠遺跡では、遺跡の埋没する層準は第4図の休場所の中位の層準以浅に限られているといわれる。

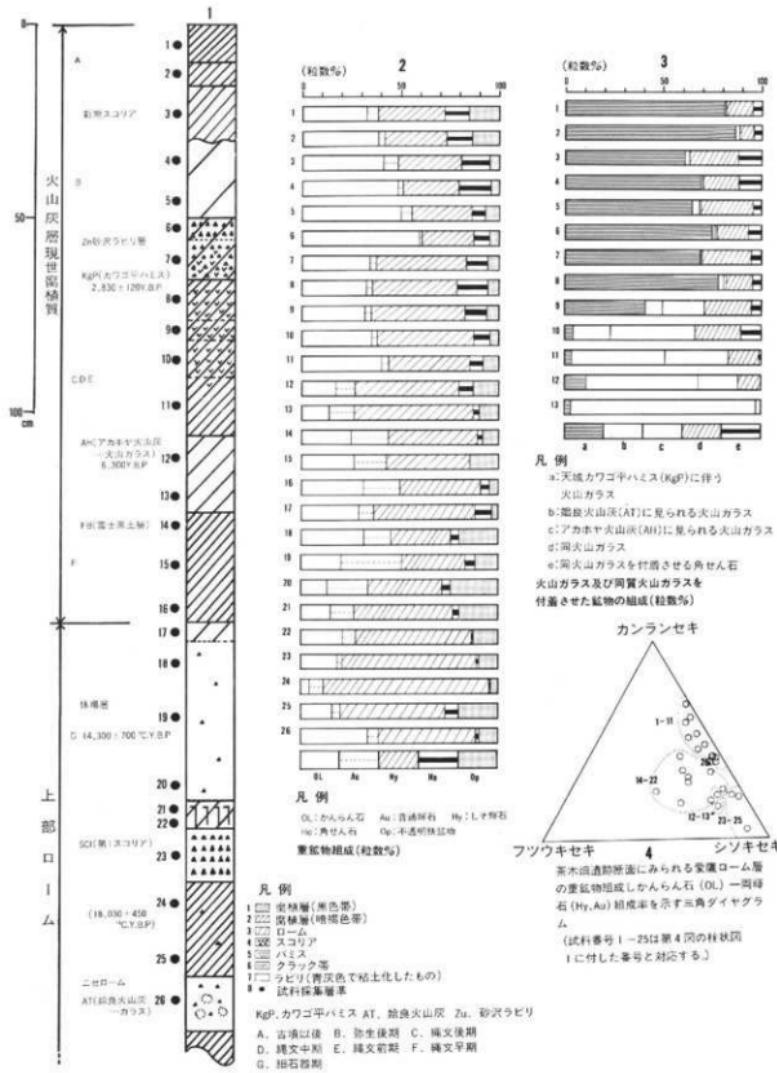
遺跡周辺の愛鷹ローム層には第6図1~3、第35図1の地質柱状図に示したように、降灰年代が14C年代で測定されている火山灰層が多い。しかし、これらの火山灰層の狭在する層準は、ある広がりをもっており、必ずしも明確ではない。そこで、第35図1の地質柱状図に●印を付した各層準の火山灰試料について、鉱物分析を試み、14C年代の測定されている各層層の狭在する層準をより明らかにすることにより、遺跡埋没層準とその時代をどの程度絞り込めるか検討してみた。

まず、重鉱物組成を第35図2に示した。また、14C年代測定値の得られている広域火山灰については下記3種について出現頻度を求めて、第35図3に示した。それらは、九州南方の鬼界カルデラ起源のアカホヤ(AH)火山灰の火山ガラス(図版第26-4)、鹿児島湾の姶良カルデラ起源の姶良火山灰の火山ガラス(図版第26-5)、伊豆天城火山カワゴ平起源のカワゴ平軽石に伴う火山ガラス同質火山ガラスの付着するしそ輝石、角せん石(図版第26-3・2)、以上3種の火山ガラスと2種の鉱物についてである。

#### (2) 重鉱物組成

ローム層の重鉱物組成を $\frac{1}{4}$ ~ $\frac{1}{16}$ mmの粒径について検討した。水洗いの後、超音波洗浄により再度クリーニングをおこない、重鉱物と火山ガラスの種別を同時に鑑定し、重鉱物の鑑定数が200個を超えるまで行った。火山ガラスが付着するしそ輝石、普通輝石については、重鉱物を200個鑑定する間に出現した個数で示した。火山ガラスについても同様である。

重鉱物組成については次の結果を得た。地表から休場所上限までの現世腐植質火山灰層には、10%内外の角せん石が分散しており特徴的である。黒雲母はなく、不透明鉄鉱物を除けば、重鉱物組成は、かんらん石、普通輝石、しそ輝石の3成分で示されるので、三角ダイヤグラムによって成分比を示した。これによると、第4図1に示した26の試料の示すかんらん石(OI)~しそ輝石(Hy, Au)組成は3つの領域を占めることが判った。現世腐植質火山灰層のうち、地表から従来アカホヤ層準とされてきた層準の直上までの試料1~11は、ほぼ等量のかんらん石(OI)、しそ輝石(Hy)からなるグループ。アカホヤ層準とされる層位の試料12~13はやや異質だがこれを含め休場所までの試料14~22は、かんらん石(OI)、しそ輝石(Hy)に普通輝石(Au)が少量付加したグループ、第1スコリアとその直下の



第35図 爰鷹南東麓茶木畑遺跡断面に見られる表層地質断面図

黒ボク試料23・25はしそ輝石(Hy)のコーナーに偏るグループに属し、ニセロームの試料26はやや異質で独立する。

試料1・11のグループはかんらん石に富み、粒度は遺跡の露頭で観察される砂沢ラビリのようなスコリア層と対応して増減するようにもおもわれる。現富士火山起源の火山灰を主としているものと思われる。第35図2・3の少量の角せん石の混入は富士以外の火山からの供給による。

試料12・13、14-22のグループは上位層とは全く異質なグループを形成している。休場層は褐色細粒物質のスコリア・ローム層であり、その特徴からみて、古富士上系統の噴出物ではないとされ、愛鷹南麓での代表的重鉱物組成はかんらん石をほとんど含まず、しそ輝石と不透明鉄鉱物で特徴づけられ、古富士上火山噴出物の主降灰域外にあった時期のものと考えられている。しかし今回の愛鷹南東麓の現地での分析値では、休場層中部から、富士黒上層の腐植が集積し火山灰の堆積速度が遅くなったとされる時期とされる層準にかけて、しそ輝石に加えてかんらん石や普通輝石が多い。この時期に、近隣の火山からの降灰があり、間欠的に影響を受けていたとも考えられる。

試料23・25のグループはしそ輝石(Hy)のコーナーに密集する。試料26を除き、その特徴からみて古富士系統の噴出物ではなく、間欠的に古富士火山からのスコリアの降下を受けていたものと思われる。

### (3) 広域火山灰の狭在する層準

茶木畠遺跡の露頭では、広域火山灰の始良火山灰(AT)とアカホヤ火山灰(AH)の2種の火山ガラスが認められ、それぞれ、14C年代で降下時期が21,000~22,000Y・B・P前後、6,300Y・B・Pとされている。この他に県下に広く分布が認められる天城カワゴ平軽石(Kgp)に伴う火山ガラスが同質の火山ガラスを付着させた角せん石、しそ輝石を伴って黒ボク中に狭在するのが認められる。この火山灰の14C降下年代は、2,830±120Y・B・P及び3,250±70Y・B・Pが得られている。

これらの火山灰は遺跡等の年代をはかる鍵層として有用であるが、火山灰はある層準に集中せず、かなり分散して出現する。そこでこれら鍵層の狭在する層準をより絞り込む目的で、次の火山ガラスの特徴をたよりに、上記火山ガラスの、各層準ごとの出現頻度を算出し、第4図3に示した。

火山ガラスを識別した基準は次のとおりである。始良火山灰(AT)とアカホヤ火山灰(AH)を構成する火山ガラスは共にバブルウォール型平板状の火山ガラスであるが、図版第26-5で示される前者の方がはるかに厚く、図版第26-4で示される後者は非常に薄く、淡褐色火山ガラスを作う点で異なる。天城カワゴ平軽石に伴う火山ガラスは図版第26-1のように気泡が非常に多く厚く、図版第26-2・3の同質ガラスを付着させた角せん石、しそ輝石を作り他と識別される。

第35図3の各層準ごとの出現頻度で、広域火山灰の狭在する層準を絞ってみる。

まず、天城カワゴ平軽石(Kgp)は、火山ガラスの付着したしそ輝石と角せん石が試料11以上の層準から明らかに出現し、試料8~6でピークに達している。露頭での観察では、試料8の層準に、網糸状の光沢をみせ、発泡し引き延ばされた感じのカワゴ平軽石が最も集中するように見える。砂沢ラビリがときに塊状をなし集中するのは試料6の層準であり、カワゴ平軽石の主たる降灰の時期はこれに接して下位にくるように思われる。

アカホヤ火山灰(AH)の火山ガラスは試料12~9の層準にわたって出現する。14C年代6,300Y・B・Pを示す層準は試料12の層準にくると思われる。

始良火山灰(AT)の火山ガラスは試料13の層準以下に出現する火山ガラスの大部分を占める。最も集中する層準は試料26の層準であり、露頭ではニセローム層中に淡黄色のガラスの粉末の塊を見ることがあることから、この層位に始良火山灰の層準がくるように考えられる。

# 図 版

図版 第1



茶木畠遺跡遠景(航空写真)

図版 第2



1. 遺跡遠景(南より)



2. A地区近景(東より)



3. B地区遠景(北より)

図版 第3

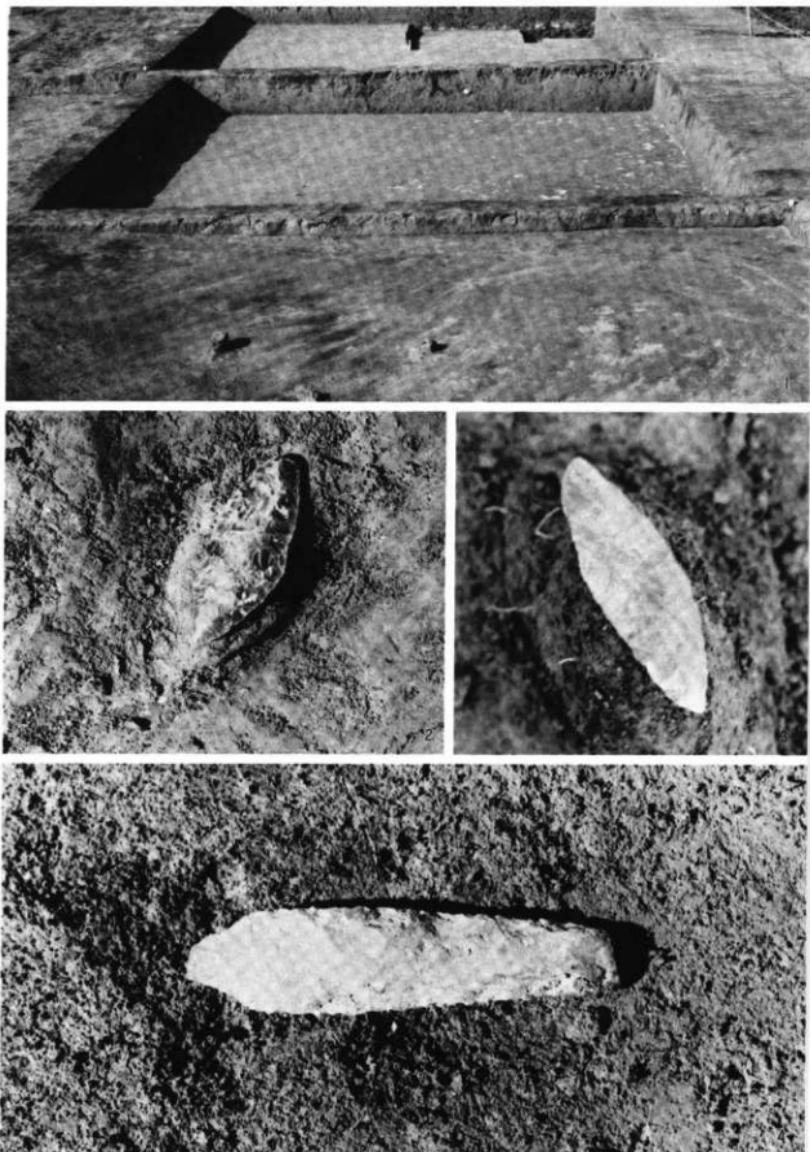


1. A・C 地区実掘状態(南より)



2. F4 区土層堆積状態

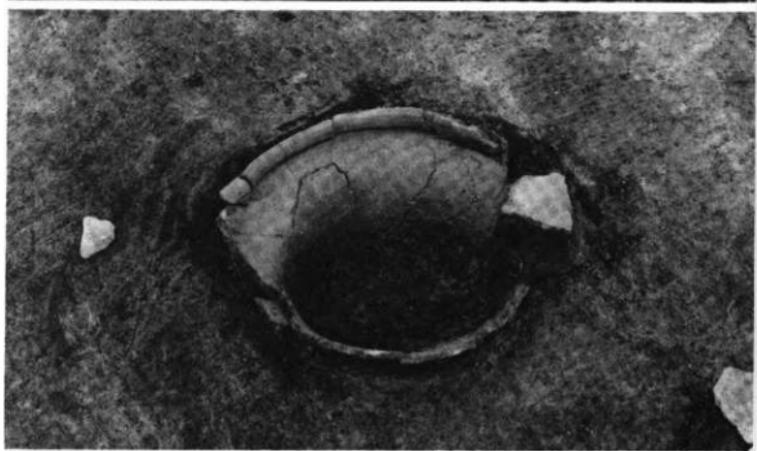
図版 第4



図版 第5



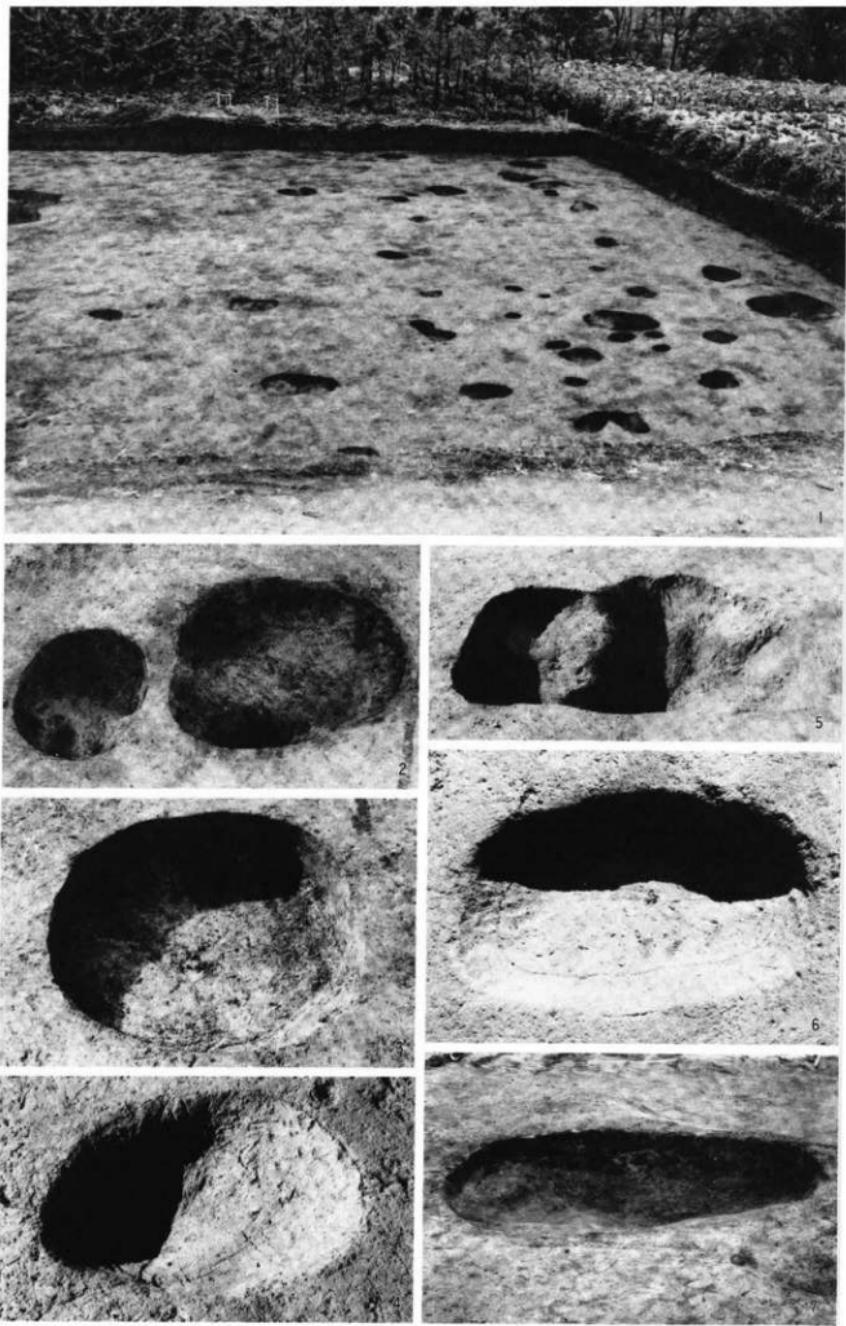
1. 埋甕 1



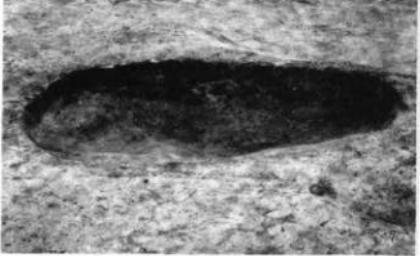
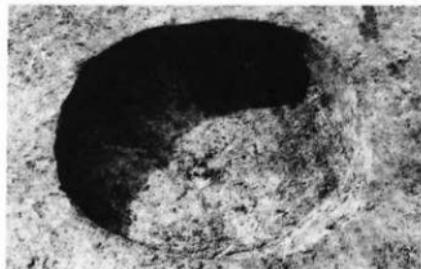
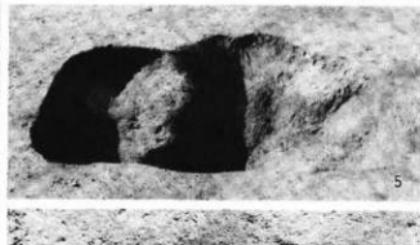
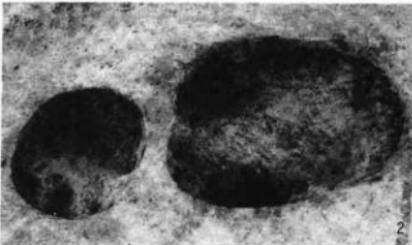
2. 埋甕 2



3. 埋甕 3



1. A地区発掘  
状態(東より)



2. ピット-12-13

3. ピット-52

4. ピット-54

5. ピット-61

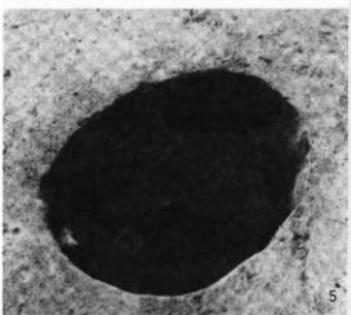
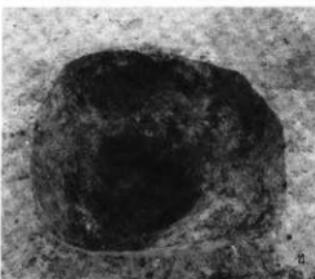
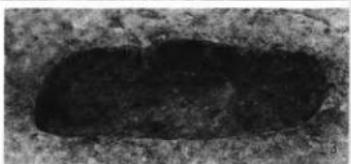
6. ピット-66

7. ピット-76

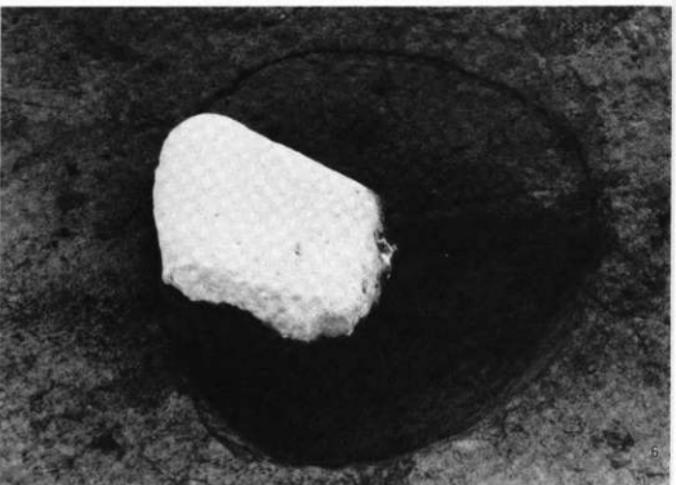
1. B地区完掘状態遠景(北より)



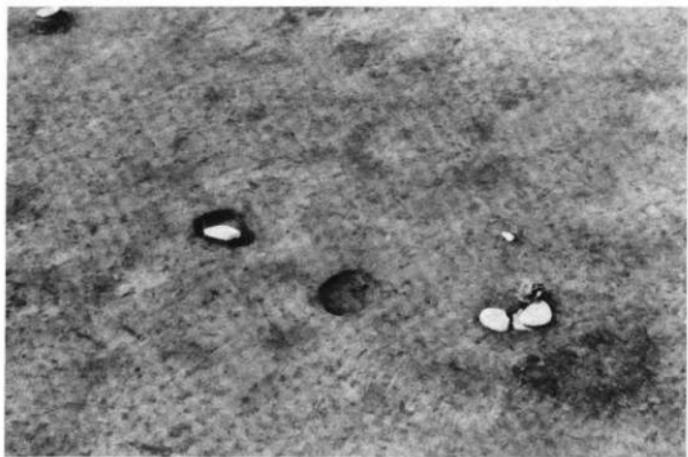
2. ピット-89  
3. ピット-93  
4. ピット-108  
5. ピット-133



6. ピット-139



1. B地区遺物出土状態



2. 大珠出土状態

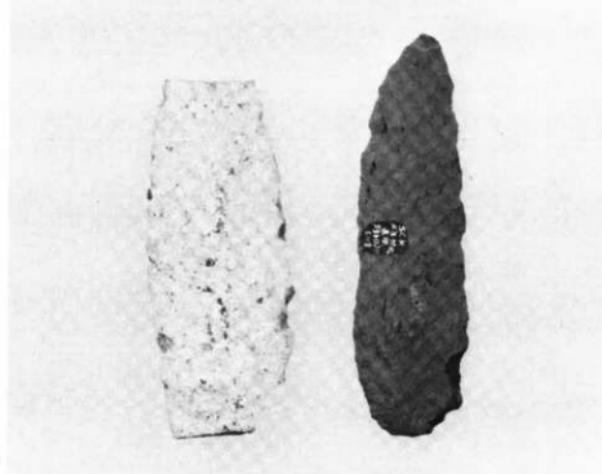


3. 石斧出土状態





1. 石器(尖頭器 1)



2. 石器(尖頭器 2)

図版 第10



1. 石器(尖頭器)



2. 石器(有舌尖頭器)



3. 石器  
(ナイフ形石器  
削器)



4. 石器(削器  
石核)



1. 土器 I (埋甌 I)



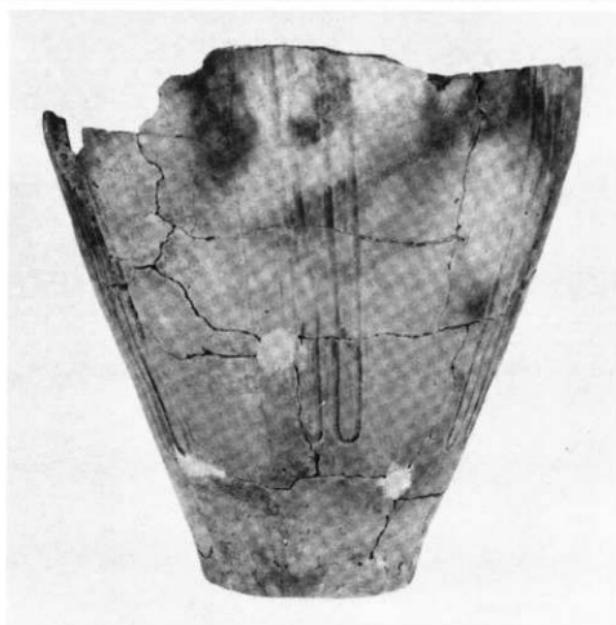
2. 土器 I (細部)



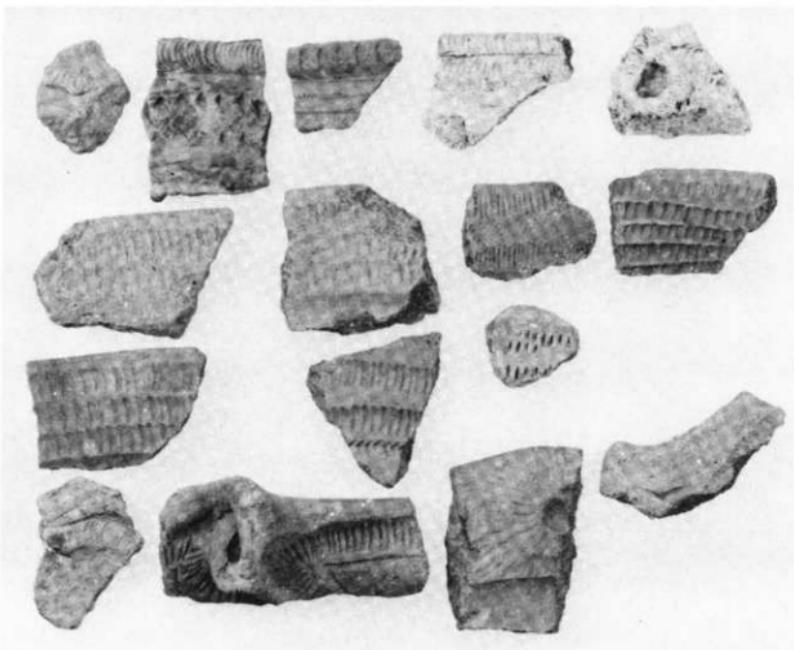
3. 土器 I (細部)

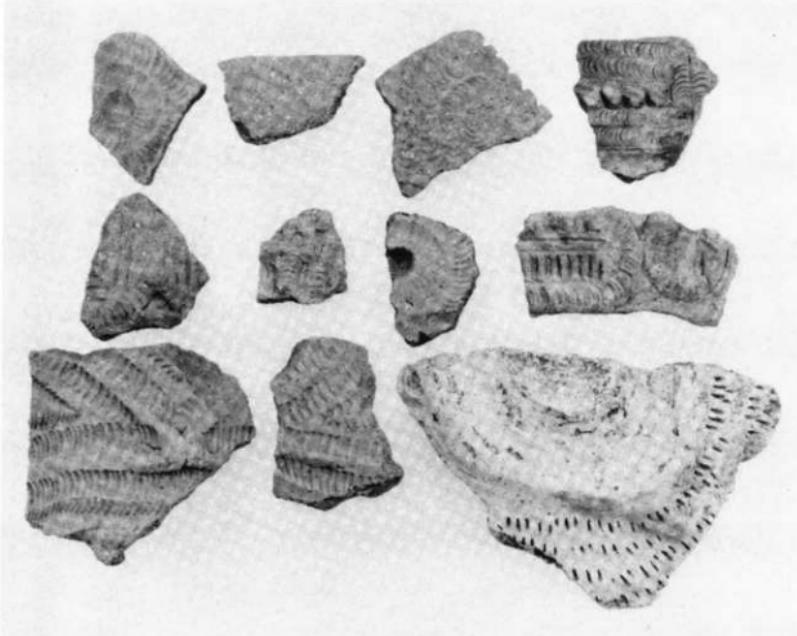


1. 土器 2(埋甕 2)

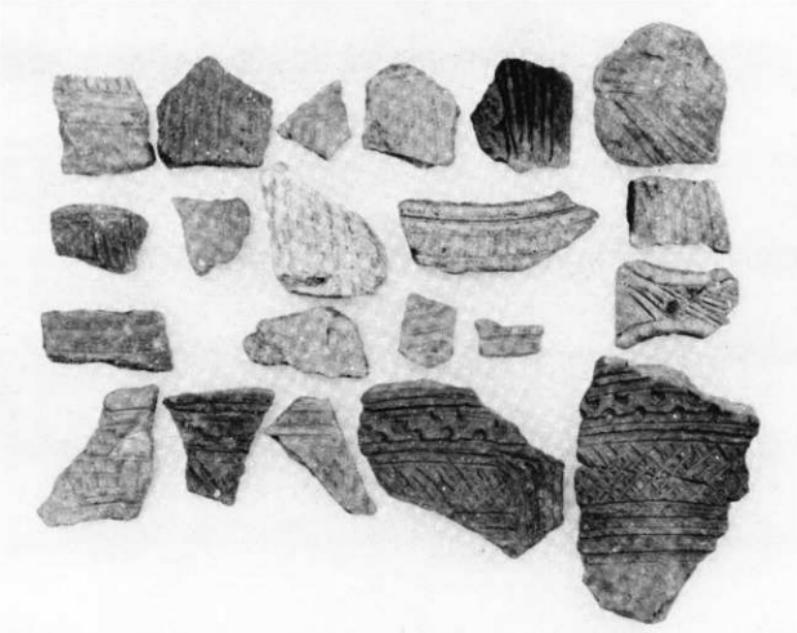


2. 土器 3(埋甕 3)





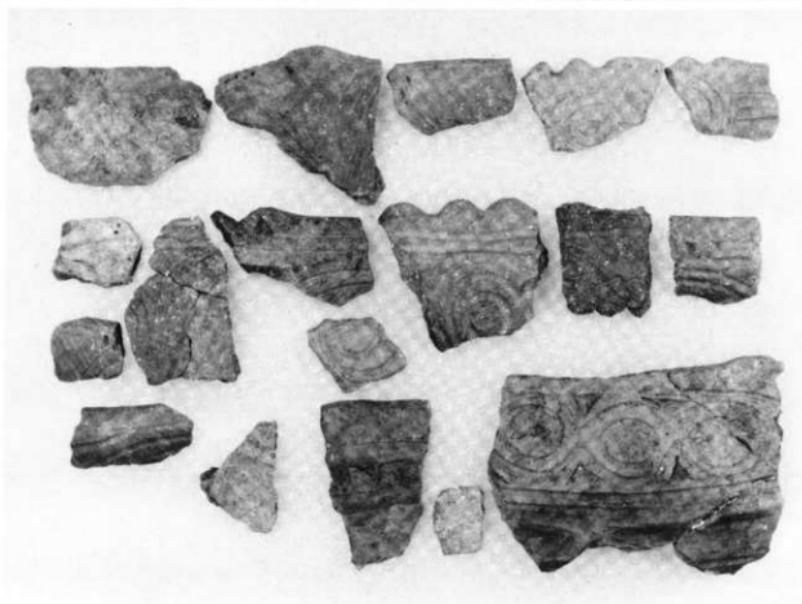
1. 土器  
(第Ⅰ群)



2. 土器  
(第Ⅱ群)

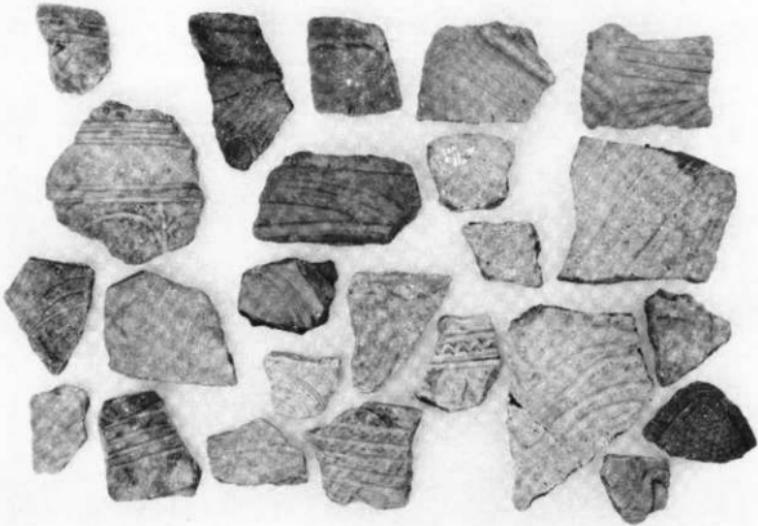


1. 土器  
(第二群)



2. 土器  
(第三群)

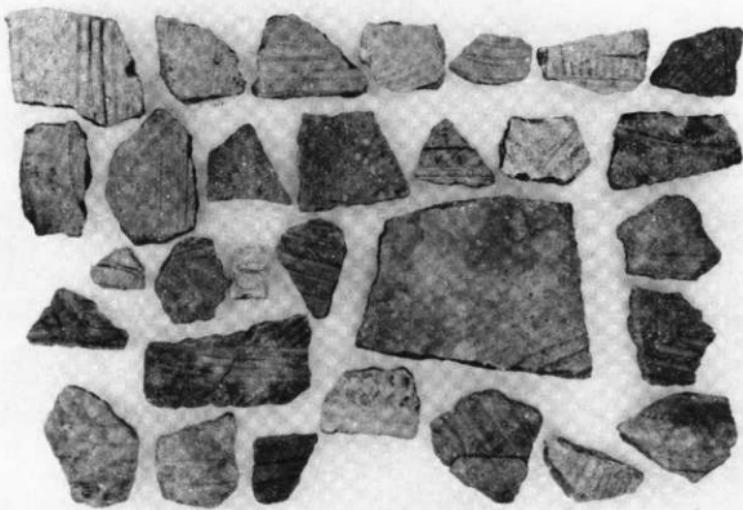
图版 第16



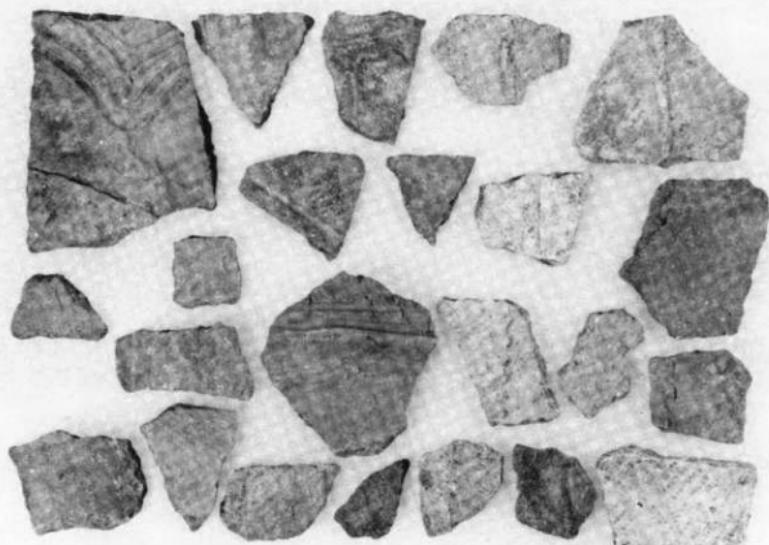
1. 土器  
(第三群)



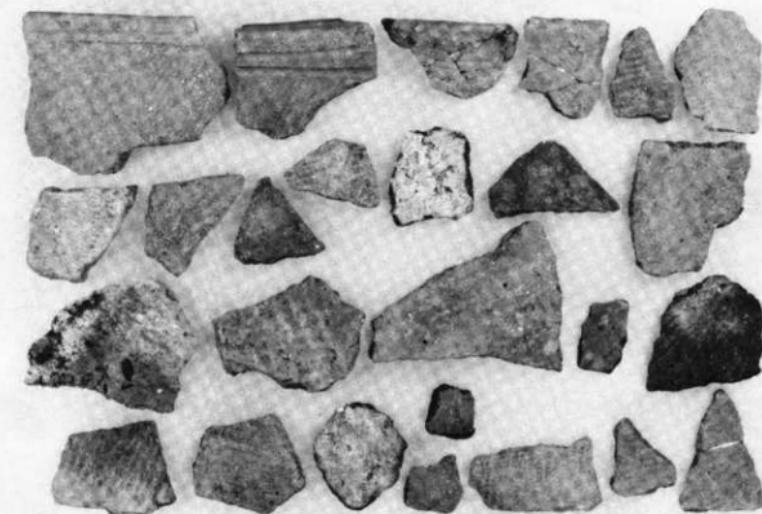
2. 土器  
(第三群)



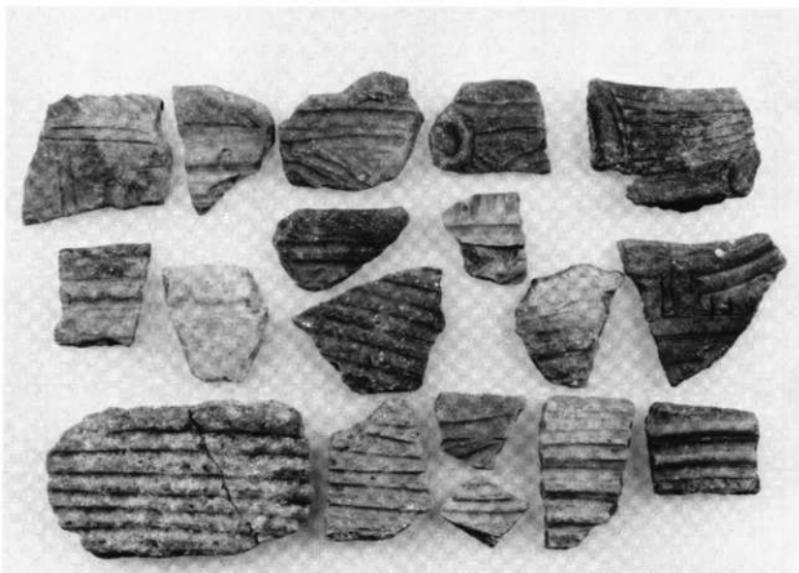
1. 土器  
(第Ⅲ群)



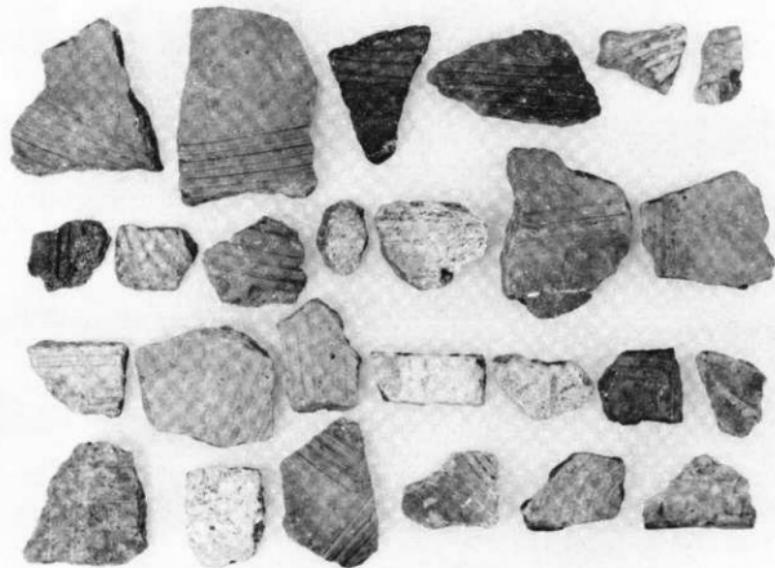
2. 土器  
(第Ⅲ群)



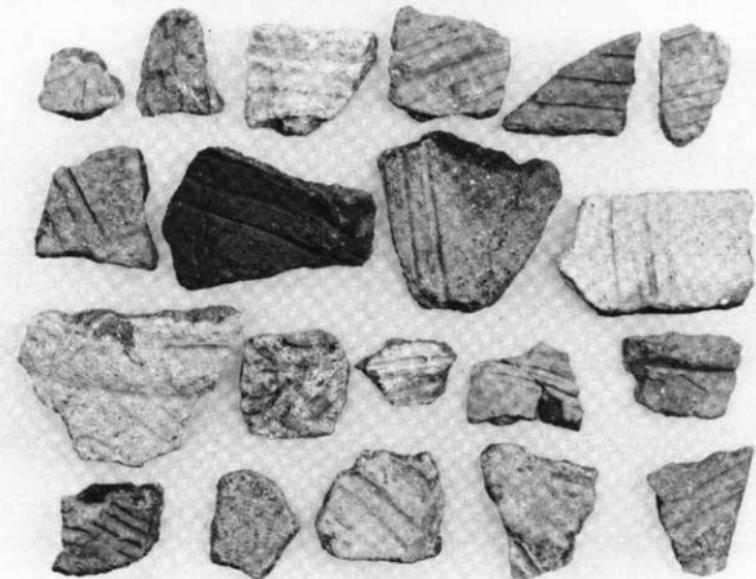
1. 土器  
(第III群)



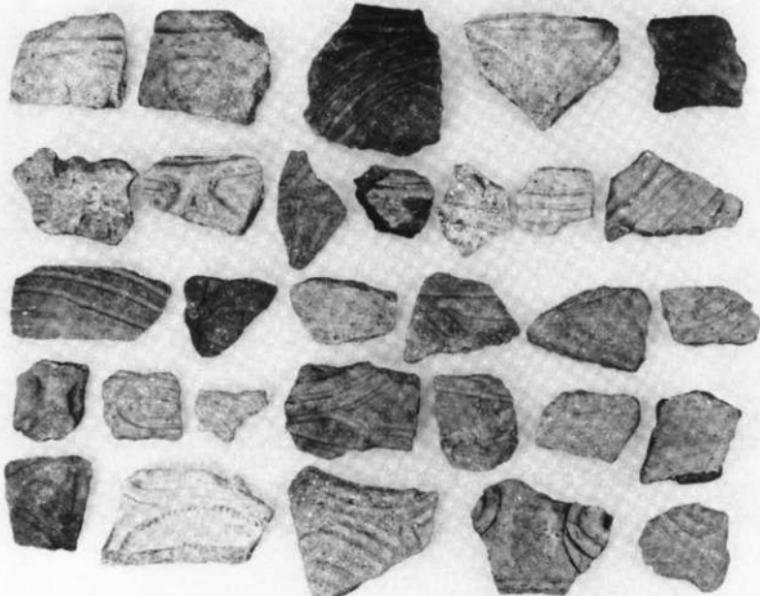
2. 土器  
(第IV群)



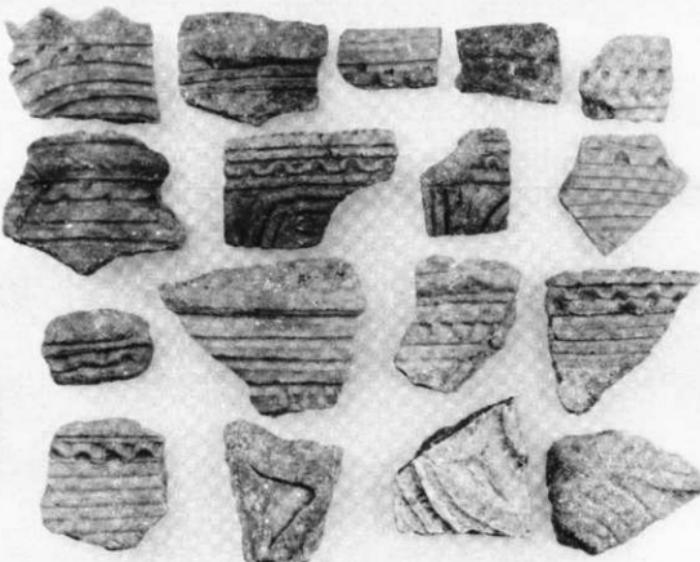
1. 土器  
(第IV群)



2. 土器  
(第IV群)



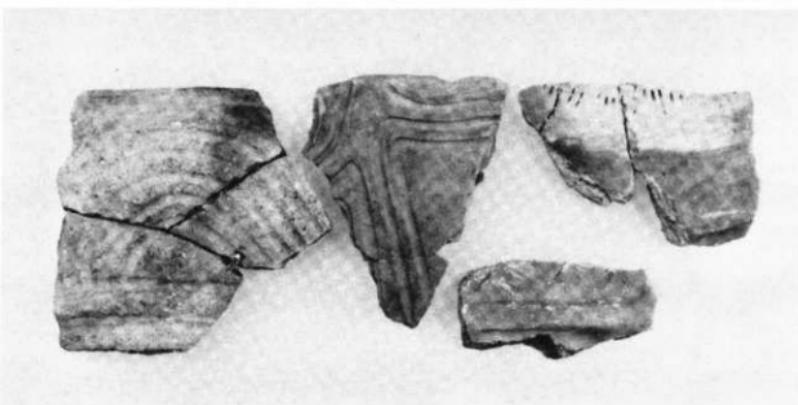
1. 土器  
(第IV群)



2. 土器  
(第IV群)

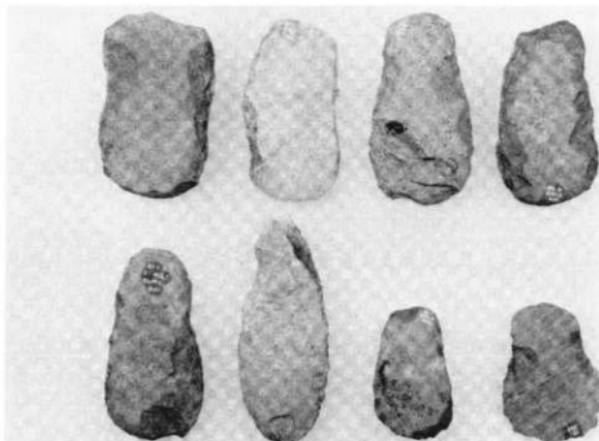


1. 土器  
(第IV群)

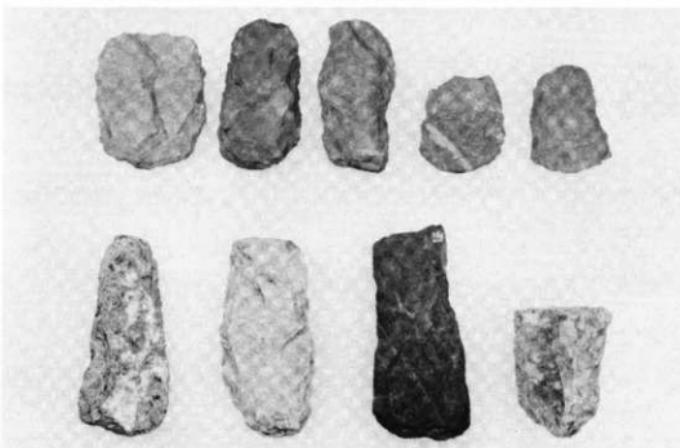


2. 土器  
(第V群)

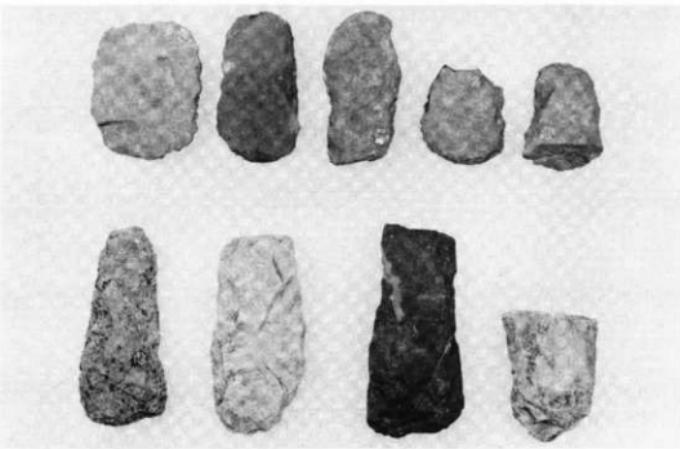
1. 石器(石斧1)

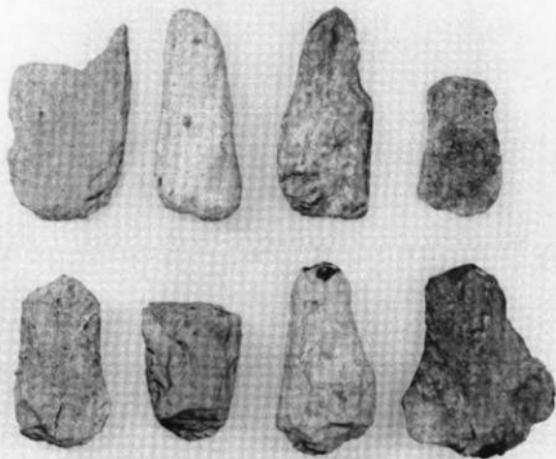


2. 石器(石斧2)



3. 石器(石斧3)





1. 石器(石斧 4)



2. 石器(石斧 5)



3. 石器(石斧 6)



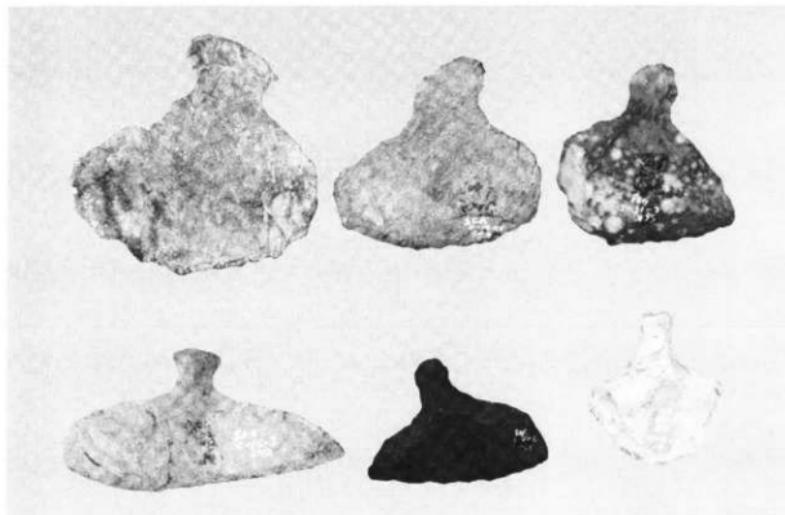
1. 石器(磨石 1)



2. 石器(磨石 2)



3. 石器(磨石 3)



1. 石器(石匙)



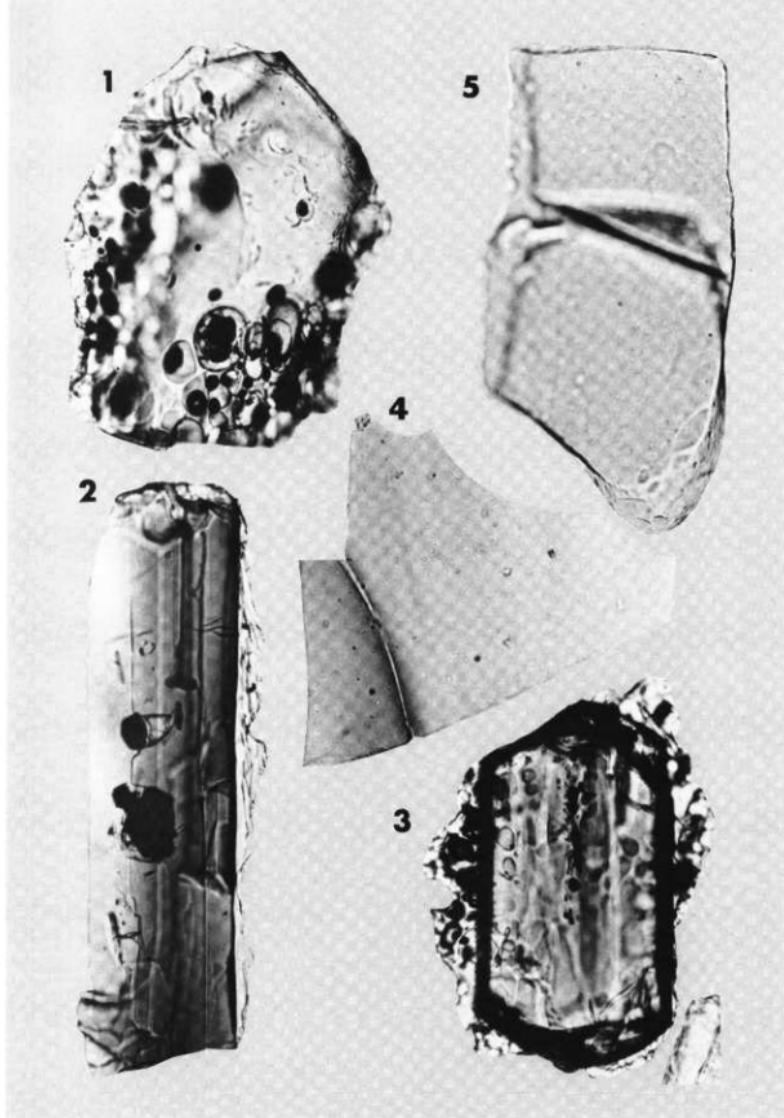
2. 石器(石匙)



3. 石器(大珠) 表



4. 石器(大珠) 裏



愛媛ローム層の現生巣核質火山灰及び上部ローム層上位の鏡層に見られる鉱物

## 茶木畑遺跡

田方学区新設高校敷地内埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和 60 年 3 月 30 日

編集発行 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
清水市江尻台町 18-5  
TEL (0543) 67-1171

印 刷 所 株式会社 三 创  
静岡市豊田 3 丁目 5-30  
TEL (0542) 82-4031